

大学評価シンポジウム報告書

社会が求める大学評価とは —大学の何を評価し社会に示すか—

公益財団法人 大学基準協会

2014（平成26）年3月4日

目 次

大学評価シンポジウム プログラム	 1
登壇者略歴	 3
1. 開会挨拶	 5
2. パネルディスカッション	 7
3. 質疑応答・フロアディスカッション	27
4. 閉会挨拶	41
<資料>	
・話題提供 1 資料	 43
・話題提供 2 資料	 51
・話題提供 3 資料	 61



大学評価シンポジウム

社会が求める大学評価とは —大学の何を評価し社会に示すか—

公益財団法人 大学基準協会

平成 23 年度より認証評価として第 2 サイクルに入った本協会の大学評価において、質保証に対する各大学の自主性・自律性を重視する立場に立って、大学の内部質保証システムの有効性に着目した評価システムへ移行しました。

この内部質保証において重要なことの一つは、教育などが一定の水準にあることを大学自らが説明・証明していくことであり、ステイクホルダーをはじめとした社会に対する説明責任を果たしていくという側面です。したがって、内部質保証を重視する大学評価においても、社会を視野に入れる必要があり、そのために評価者が大学の何を評価し、評価結果として社会に示すべきか考えることは極めて重要なことです。

そこで、高等学校や企業など、ステイクホルダーの目線から大学評価を通して知りたいことなどを話題提供してもらうことで、本協会や評価者が何を念頭に評価し、評価結果として社会に示すべきかなど、自己認識することを図って、大学評価シンポジウムを開催いたします。

日 時 平成 26 年 3 月 4 日（火）13 時 30 分～16 時 00 分（開場 13 時 00 分）

会 場 ホテルグランドヒル市ヶ谷 東館 3 階「瑠璃」（東京都新宿区市谷本村町 4-1）

<アクセス> JR、東京メトロ有楽町線・南北線、都営新宿線：「市ヶ谷駅」駅下車 徒歩 3 分

◆◆プログラム予定◆◆

13 : 30～13 : 35 開会挨拶

13 : 35～14 : 55 パネルディスカッション

「社会が求める大学評価とは—大学の何を評価し社会に示すか—」

○パネリスト：

山本 和彦（千葉県立船橋高等学校 教諭）

小林 浩（（株）リクルートマーケティングパートナーズ

リクルート進学総研・リクルート『カレッジマネジメント』所長・編集長）

坂本 明雄（高知工科大学 情報学群 教授）

○モデレーター：

清水 一彦（筑波大学 副学長・理事）

14 : 55～15 : 10 休憩

15 : 10～15 : 55 質疑応答・フロアディスカッション

15 : 55～16 : 00 閉会挨拶



平成 25 年度 大学評価シンポジウム

登壇者略歴

(登壇順)

<パネリスト>

山本 和彦

千葉県立船橋高等学校教諭

専門分野は、進路指導、キャリア教育、理科教育、地学教育。

1977 年 3 月東京学芸大学教育学部初等教育教員養成課程理科選修卒業。

1977 年 4 月千葉県立千城台高等学校教諭、その後、千葉県立市川南高等学校教諭、千葉県立佐倉高等学校教諭、習志野市立習志野高等学校教諭千葉県立松戸国際高等学校教諭を経て、現在に至る。その間、1983 年から 2013 年 3 月末まで各高等学校の進路指導部に籍を置き、進路指導に関わる。

2007 年 4 月より大学基準協会短期大学評価委員会委員を務めるとともに、大学入試センターや全国高等学校進路指導協議会が主催する進路指導等に関するシンポジウムのパネリストなども務める。

小林 浩

リクルート進学総研所長・リクルート「カレッジマネジメント」編集長

1988 年早稲田大学法学部卒業。

1988 年 4 月、株式会社リクルートに入社し、大学・専門学校の学生募集コンサルティングマネジャーなどを経て、社団法人経済同友会に出向し、教育政策提言「若者が自立できる日本へ」の策定に関与。その後、進学カンパニー・ソリューション推進室長などを経て、2007 年より現職。

2009 年～2011 年、文部科学省「熟議に基づく政策形成の在り方に関する懇談会」委員。

2012 年からは文部科学省「大学ポートレート(仮称)準備委員会」委員や文部科学省中央教育審議会高大接続特別部会臨時委員、2013 年より文部科学省中央教育審議会大学分科会短期大学ワーキンググループ臨時委員。

坂本 明雄

高知工科大学教授 工学博士

研究分野は、グラフ理論、アルゴリズム、メタヒューリスティクス。

1971 年大阪大学工学部電子工学科卒業、1976 年同大学院工学研究科電子工学専攻博士課程修了。

1976 年徳島大学工学部助手、同工業短期大学部教授、同工学部教授、そして 1997 年から高知工科大学工学部教授。2000～03 年、同学生部長、2003～11 年、同教育本部長、2003～13 年、同工学部長、2011～13 年、情報学群長。

大学評価に関しては、日本高等教育評価機構評価員（2005～08 年）および大学基準協会大学評価委員会委員（2011～13 年）。

<モデレーター>

清水 一彦

筑波大学副学長（学生担当）・理事 博士（教育学）

研究分野は教育制度学。

1974 年東京教育大学教育学部卒業、1976 同修士課程修了。1980 年筑波大学大学院博士課程教育学研究科単位取得退学。

清泉女学院短期大学を経て、1988 年より筑波大学。2007 年筑波大学大学院人間総合科学研究科長、2009 年より筑波大学副学長・理事を務め、現在に至る。

現在、大学基準協会大学評価委員会副委員長、同大学評価企画立案委員会委員。短期大学基準協会理事。文部科学省中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ委員。

以上

【開会挨拶】

納谷 廣美

大学基準協会 会長

明治大学 学事顧問

司会 本日はご多忙の中お集まりいただきましてまことにありがとうございます。ただ今より、公益財団法人大学基準協会「大学評価シンポジウム 社会が求める大学評価とは―大学の何を評価し社会に示すか―」を開催いたします。

初めに、このたびのシンポジウムの開催に際し、大学基準協会を代表いたしまして、本協会会長、納谷廣美よりご挨拶を申し上げます。

納谷 こんにちは。ただ今紹介を受けました大学基準協会の会長の納谷でございます。年度末のお忙しい時期にこのように、多数ご参加いただきまして、心より感謝と御礼を申し上げます。今回の大学評価シンポジウムでは、御多忙にもかかわらず、パネリストをお引き受けくださった3名の先生方、千葉県立船橋高校の山本和彦先生、株式会社リクルートマーケティングパートナーズ的小林浩先生、高知工科大学の坂本明雄先生、さらに、モデレーターをお引き受けいただいた、筑波大学の清水一彦先生に対して、心からおえらりと感謝を申し上げたいと思います。

この会場は、私が以前、明治大学で第1期の自己点検・評価を実施した結果を研究報告させていただいた場所で、非常に思い出のある場所であり

まして、ここで、今会長としてご挨拶できることを非常に光栄に思っております。

皆様もご存じのように、大学評価と短期大学認証評価といのは、2期目の3年目または、2年目というところに入ってきております。だんだん浸透してきているところだと思います。

しかし、あとからお話もあるだろうと思いますが、大学の評価とは何かという話から始まりまして、認証評価とは何かということも、必ずしも世の中に知れ渡っているわけではないし、理解が深まっているとは思えません。

他方、大学の人間から見ると、“評価疲れ”というか、やるだけで何か大変だということの思いしか残っていないというところも、大学によってはあるのではないかと思っております。

そういう中で、今日このテーマのもとで、社会の方から見て、どういう大学評価をしていただきたいのかということを中心にして、第3期の認証評価制度のあり方についても、何らかの形で示唆をいただければと思っております。皆さんの声を聞いて、いろいろ考えていきたいと考えております。

ご存じだとは思いますが、認証評価が果たす2つの役割がありまして、1つ目は、やはり自己点

検を通して第三者評価という認証評価を経て、それを大学の改革にどのように使うかということです。そこで教育研究の質の向上等々に役立ててもらいたいというのが、その大きな1つでございます。

もう1つは、社会に対して自分の大学をどういう具合にアピールしていくか、これは、プラスもマイナスも含めて、理解をしていただくためということです。

今大学は何をやっているのかという批判がありますが、こういうことに対して、個々の大学はもちろんのこと、大学人全体としても、我々は、こういう形で皆さんのニーズに対応するような研究教育や、社会貢献をやっていますよというようなことを、世の中に発信していく、それが必要であると思います。その一里塚として、認証評価制度もあるのだということもきちんとご理解いただきたいと、私は考えております。

自分たちだけが満足するだけではなく、それを理解していただき、社会から支えてもらわなければ、大学教育というのは有効に動かないのです。それは、ここに集まった方々の責任でもありますし、課題でもあると考えておりますので、今日のシンポジウムをそういう形でぜひご利用いただければと思っております。

大学における教育研究というのは、過去の蓄積を評価して、つくり上げていく。そして、それを次の時代のためにまたそれを否定して、新しいものをつくり上げる、そういうことをやるのが学問でございます。

ぜひそういう意識をもって、今日のシンポジウムにご参加の上、積極的にここで発言いただいて、

ご意見を賜ればうれしく思っております。

モデレーターの清水先生はよく大学評価のことを十分に理解されており、皆様のご意見やご質問にも対応していただけると思います。

また、パネリストの3名の先生方、山本先生は、高校のほうの“入口論”のところから見て、どういう評価したものを公表してもらいたいということをおっしゃるだろうと思います。

リクルートの小林さんは、大学の“出口論”といいいますか、会社の方から、どういう社会人の育て方をしてきたのかというサイドからお話があるのではないかと思います。

それをまとめて、高知工科大学の坂本先生のほうで、今までの認証評価を通した経験を通じて、第3期の認証評価について何らかの示唆があつて、そこへ皆さんとの意見交換の結果、何らかの提言がされるのではないかと期待しております。

本日は、ぜひ有意義な時間を過ごしていただき、大学へ戻りましたら、今日の話を参考にして、お互いに議論し合って、自分たちの大学をどのようにしていくか、日本全体の大学をどうするのかということを、志高く掲げて改革に取り組んでいただければと思っております。

少し長くなりましたが、会長としてのお願いと御礼、感謝を申し上げて、挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

【パネルディスカッション】

社会が求める大学評価とは—大学の何を評価し社会に示すか—

パネリスト 山本 和彦 (千葉県立船橋高等学校 教諭)

小林 浩 ((株) リクルートマーケティングパートナーズ)

リクルート進学総研・リクルート『カレッジマネジメント』所長・編集長)

坂本 明雄 (高知工科大学 情報学群 教授)

モデレーター 清水 一彦 (筑波大学 副学長・理事)

◆話題提供1: 山本 和彦氏

司会 それでは、パネルディスカッションの前に、話題提供として、3人の先生方にお話をいただきます。

最初は山本和彦先生からお願いいたします。

山本先生は千葉県立船橋高等学校にて教鞭をとっておられます。

それでは、山本先生、よろしくお願いいたします。

山本 山本和彦でございます。よろしくお願いいたします。

ちょっと飛躍しているところもあるかもしれませんが、私の方で用意しましたものを、幾つか、お見せしながらお話ししたいと思います。

今年は進路指導に関わっていないのですが、私は、教員生活37年のうち、28年間は進路指導部にいました。その経験から、特に思い出すのは、偏差値中心の考え方から大分変わってきたということです。そういうこともありまし

て、今日は、評価に関する話を話していきたいと思います。

まず、最初のスライドですが、これは私のおります県立船橋高校の進路指導室、生徒用の部屋です。この中で、例えば正面の緑のものは大学の案内です。要項とか、その他が入っています。右側の方には、いわゆる“赤本”とされている入試問題があります。この部屋は生徒が自由に利用できる部屋ですが、この中に大学評価の資料があるかと言えば、ありません。これは県立船橋高校だけではありません。これは以前、私がおりました佐倉高校の様子ですが、このときには主事をしていましたので、大学のシラバスを取り寄せて、それを加えたりしております。しかし、現在もそうだと思いますが、この中に評価にかかわる資料はありません。

では、どうしてその資料はないのか。私は山登りをしますので、それを例にして考えてみたいと思います。山登りは大体5合目からと言われますが、仮にいろいろな資料を活用している

状態を10合目と考えまして、比較的使っている状態が6合目とか7合目、私の最終的な考えとしましては、評価資料をこの辺りで利用できればいいのではないかと考えていますが、大部分の人でうまくいったとしても、5合目辺りまでではないかと思っています。そして、ほとんどの方が、登山で言うと、まだスタートに立つというところではないかと思っています。

それはどうしてか。ちょっと重複しますが、私は、大学評価についての見方について、こういうような感じを持っています。私がこれに相当するかなとは思いますが、個人的に利用している状態が9合目ではないかと思っています。それから、利用するといいとわかっているけれども、まだ活用していないというのが、8合目ぐらいではないかと思っています。果たして効果があるのかどうか。それを使って、ほかの資料と比べていいものかどうかと躊躇している状態が7合目ぐらいであると思っています。それからすそ野が広がっていきますが、それに合わせた形で人数がふえていくのではないかと考えています。使用方法、活用方法がわからない、それから、活用するかどうか、手元にそんなものがない、あるいは、そういうものの入手方法がわからないというのが、スタートの段階ではないかと思っています。

この辺からになりますと、大体、各学校の進路指導部で割と意識がある先生方、進路指導、進学指導に対する意識が高い先生方が、この辺りであるかと思っています。

ところが、それよりも下、5合目以下にたくさんいるわけですので、こういうような人が大多数ではないかと思います。まず、その外部評価が行われていること自体を知らない、聞いたことがない、それから、聞いたことはあるけれども、どんなのかわからない、どう利用されているか、こういうふうに公表されているかわからないというのが大部分ではないかと思われるます。

それで、大学を選ぶ際に、大学評価の結果がその大学を選ぶ選択肢になるか。例えば、生徒が選ぶ際、あるいは我々が生徒に対して指導する際に、何がその大学で学べるか、就職がどうだろうか、それと、入れるか、学力があるかどうか、そういう点をまず考えるかと思っています。この選択肢の中には評価の結果が入ってくるかと言いますと、その大学を選択する際の直接の資料にはならないと考えています。

では、どうであるか。このあと、私が活用した例を話しますが、大学評価は大学を比較する、その教員の資料として、生徒ではなくて教員の資料としては可能かもしれない。そういうふうに考えます。最後に細かく話をしたいと思います。

さて、まず私の活用の前に、これは、大学基準協会の評価結果の一例をまとめました。少しは読みやすいかと思うのですが、こういうような評価結果をまず読むかということと大部分の方は読まないと思います。私ぐらいになりますと読むかもしれませんが、大部分の人、または、

大学評価がわかっている人であっても、あまり読まないと思います。ただ、ここには定員充足率であるとか、財務であるとか、非常に重要なことがいろいろ書かれているわけですので、とても必要なことだと思うのです。私にとっては宝の山といいますか、そのような印象を受けているのですが、大多数の先生はこれをどう感じるでしょうか。やはり読まないと思います。

それでは、少し極端な話になるかと思いますが、私がどう活用したか、いくつか話をしたいと思います。利用したのはこの3種類、不適合について、比較の資料として、それから手持ちの資料として活用をしています。

まず、不適合についてですが、これは大学基準協会ではなくて、別の認証機関のものを利用したのですが、生徒がこういう大学に行きたいということを言ってきたのですが、保護者はその大学について、少し疑問を持っていたようでした。

私も、その大学については、いろいろ情報を聞いていましたので、それを納得させるような形で保護者に説明するためにこの評価結果を利用させていただきました。

経営姿勢とか、学生の充足率とかもあります。が、教員の人数とか、研究体制とかいうものを含めて、こういう状態であるというので、できれば控えたほうがいいのではないかという話に使ったことがあります。他にも納得させる資料として、パンフレットや情報誌にはない材料として使わせてもらったことがあります。これ

はマイナスの意味かと思います。

続きまして、比較検討の資料として利用したのですが、これは似たような大学でどちらがいかという場合ですが、一般の情報から得た内容をその大学が実際にやっているかどうか確認したい場合、評価結果には、ほかと比べて優れている点を長所という形で取り上げているかと思いますが、評価結果を使って、よりこちらのほうがやっている、それから、学生の人数はどうであるかなどというのを、比較の資料として扱っているということがあります。それから、内容につきましても、評価の中で、こういう点がいいという記述がありますので、こちらの大学はこういう点がいいから、自分に合っているのはどこだろうということで選んでいく際に使わせてもらいました。

それともう1つ、手持ちの資料としてというのですが、今申し上げましたように、長所がどのようなところにあるかというのを、私自身が知っておくと、大学名を挙げられないで迷っている生徒には、こちらからこの大学はこういうことがあるんだよと提示できるかと思います。

逆の意味で、保留になっている大学等、何でそうになっているかという内容について知っておくことが、パンフレット等に見られない事や、パンフレットの裏付けになる事を確認する意味で利用できるかと思います。これは私が活用した例です。

このパネリストを依頼された際に、要望もできればお願いしたいと言われたのですが、高校

現場の私の立場では要望は出せないと感じております。といいますのは、大学進学に際して、情報誌のようなものに対しては要望とかを我々は言えると思うのですが、評価結果というのは何であるかというものを考えますと、そういう選択肢上に乗っていないものであり、それに対して我々が要望を出せるかという、それは少し違うのではないかという印象を受けました。要するに、評価結果というのは報告書であるだろうと私は感じています。それをいかに利用するかは、我々のほうがそれをどのように利用していくかどうかであって、要望を出すというようなものはないと思います。

ただ、少し言わせていただきますと、大部分の方が大学評価、外部団体による評価が行われていること自体を知らないと思いますので、大学評価ということについて広報活動していただきたいと思うのです。

私のおります高校は千葉県にあります。千葉県は特殊で、進学指導部会と進路指導部会と2つあるのですが、どこの学校でも必ずどちらかに参加していますし、研究協議会も、年に1～2回で行っているかと思います。いずれの部会でも大学評価の話を入れて、これを利用してほしいというような話をしているのですが、その会合に出た先生は、確かに名前は知っていますし、評価していること自体は知っていますが、それをどう利用しているか、どう利用したらいいかというところまではわからないというのが現状ではないかと思います。

この広報活動といいますのはいい意味での広報活動あって、大学が広報活動でしているのと同じようなことではないかと思いますが、利用する側からすれば、こういういい点がある、自己点検・評価において、こういう点が利点である、そういう点をぜひ宣伝してほしいと思うのです。さらに、これは難しいと思うのですが、こういう点でいいのだという説明があると使いやすいかなと思います。できればそういうことから、高校の教員が手持ちの資料として、何かの進学指導に際して、生徒から質問があった際、すぐ利用できるような身近な資料として活用できるようなものになればと思うのです。ちょっと難しいかもしれませんが、情報誌ではありませんので、直接利用するものにはなり得ないとは思いますが、何かの際には、調べられる資料となるかと思います。そういう意味で、そんな説明とか、広報とかをお願いしたいというのが、私の感じている点です。

以上で私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました（拍手）。

◆話題提供2：小林 浩氏

司会 山本先生、ありがとうございました。お2人目は小林先生にお願いいたします。

小林浩先生は、リクルート進学総研所長、リクルート「カレッジマネジメント」の編集長をされております。

小林 どうも皆さん、こんにち。ただいま

ご紹介にあずかりましたリクルート進学総研究所長で「カレッジマネジメント」の編集長をしております小林と申します。今日はよろしく願いいたします。

私からは、大学評価というよりは、高校、大学、企業とつなぐところを見ておりますので、ステイクホルダーから見た大学ということで話題提起をさせていただきます。

まず、進路選択する立場からということで、高校生、保護者それから高校の先生というところを、調査データをもとに共有をさせていただきたいと思います。

このグラフですが、これはリクルートで毎年やっております進学ブランド力調査というものです。これは縦軸が知名度になっておりまして、縦が100%、横が志願度になっています。高校の3年生になったばかりの4月に、この知名度と志願度を聞いておりまして、そこをマトリックスにしたものです。こうなりますと、ここに一部、よく名前を聞く大学で、知名度も志願度も高い大学がありますが、多くの大学さんはここに集まっておりまして、要は、高校3年生の4月の段階では、余り大学名、その中身とも知られていないということがわかると思います。知名度平均で言うと、大体大学が25%で、平均で4人に1人しか大学名を知られていないというような状況にあります。中身についてはまだ全然伝わらないので、志願度まで結びつかない、いわゆる有名大学に集中するということがあると思います。

これは、関西、東海も同じような率になっていまして、大学数が少ない分だけ、東海のほうが平均知名度が高くなっているというような状況でございます。

これは高校生に聞いた、何を重視して進路を選択しましたかというものです。私どもでは学校選択重視項目と呼んでいますが、トップが、学びたい学部、学科、コースがある、それから、校風や雰囲気がい、自分の興味や可能性が広げられる、就職に有利、自宅から通えるというふうになっております。これは2009年と2013年を比べたところでございますが、伸びている項目でいきますと、例えば自宅から通えるとか、教育方針、カリキュラムが魅力的とか、勉強するのによい環境とか、教育方針や内容に関する項目、それから卒業後に関する項目、地元進学、学費に関する項目というのが、リーマンショック以降伸びております。そして、卒業後に社会に出てから活躍できる力がつけられるかどうか、それから、自宅から通えるとか、学費や奨学金など、できるだけ負担を軽くできないかというところで、いわゆる実利志向というところが高まっているということが言えると思います。

これは経年でやっておるのですが、高校の進路指導の先生に、進学の観点から、大学、短大に求めるものは何ですかと聞いたところ、大体2トップがございまして、これを“鉄板”と私たちは呼んでいるのですが、わかりやすい学部・学科名称と、入試種類の抑制ということで

す。1991年では、大体29しか学部・学科名称がなかったものが、今では、学部の学士の種類でいくと700以上ということになっておりまして、学部・学科名称が複雑すぎて中身がわからないというのが一番の困ったことだということです。2番目が、入試の種類が多すぎて、よくわからないということです。

そして、先生方から、よく就職の話を聞きますので、今回初めて就職実績の公開を選択肢に入れましたところ、3番目にそれが入って来るというような状況になっております。

要は、こうした学部・学科名称から学ぶ中身がわからない、入試も、推薦とかAOあるいは一般入試はわかるのだけれども、自己推薦とか公募制になってくると、もうわからないと。あと就職実績も分子と分母が正確に出ているかどうかかわからないということを言うわけですね。よく最近は高校生にインタビューしても、「就職率って、ごまかせますよね」と言う高校生が出てきて、「だれが言っているの」と聞くと、「先生が言っています」と言うのですね。

ですから、高校の先生は結局、自分で見てきなさい、聞いてきなさいと言って、オープンキャンパスに皆が参加するといったような状況になっております。

これは保護者ですが。全国のPTA連合会とリクルートで合同調査をやっているのもので、保護者の進路のアドバイス、お子さんに対する進路のアドバイスするのは難しいですかと聞いておりますが、何と7割以上が難しいと回答

しています。では、なぜ難しいと思いますかというのを聞いたものがこちらになりますが、これが2つありまして、1つが将来不安ですね。将来がどうなっているかわからないからというものがトップに来ていまして、2番目が、最新の大学情報、入試情報を知らないからアドバイスができないというのが、保護者の不安の背景にあります。では、どんな情報が欲しいですかと、保護者に特に重要な進学情報というのを聞いております。これも2009年から2011年、2013年と聞いておるのですが、実は2009年、リーマンショック以降、トップが入れかわっています。2009年まではずっと入試の仕組み、つまり、どうやって入るかというのがトップに来ていたのですが、2011年からトップが進学費用というふうになりまして、今回は進学費用だけ伸びているというような状況になります。欲しい情報のトップ3つ、4つを見ますと、進学費用、入試制、学部・学科の内容、将来の職業、就職の状況ということで、入るだけではなくて、何を学んで、どういうふうな将来があるのかというところを、厳しく見ているということがわかれると思います。

次に、企業側です。私たちは「“学ぶ”と“働く”を繋ぐ」と申し上げていますが、企業側から見た大学というところになります。

これは、経団連が、「産業界に求める人材像と大学教育に関するアンケート」というのをやっているのですが、これを私どものほうでまとめたものになります。緑が文系で青が理系にな

ります。そうしますと、理系のほうでは、この専門分野の知識を身につけるというところで期待が高まっているわけですが、他に大きく言いますと3つありまして、1つが論理的な思考力、課題解決力を身につけてほしい。2つ目がチームを組んで特定の課題に取り組む経験をさせてほしい。3つ目が実社会や職業とのつながりを理解させる教育をしてほしいというのが、文系を中心にトップ3になっております。つまり、座学だけではなくて、実社会で活用できる力、アクティブラーニング、プロジェクトベースラーニング、PBLみたいな取り組みが期待されているということが言えると思います。

これは学生側に聞いたものですが、将来の仕事やキャリアを考える上で、大学時代に影響を受けた経験というものは何ですかというのを聞いております。棒グラフは文系、理系、合わせたものになっているのですが、折れ線グラフが文系、理系、分かれております。そうしますと、このブルーは理系になっておりまして、1位が大学、大学院の専門分野の勉強、それからゼミ、研究室の仲間、それから大学の先生との繋がりというのが出ております。一方、このオレンジの文系を見ますと、1位が友人とのかかわり、2位がアルバイトとなっておりまして、特に文系では大学の授業や先生等の影響が薄いということが出てきております。これを見ますと、昔、私達の時代だけだろうと思っていたものが、やはり今の大学生もそんなふうを感じ

ているということ、データから見てとれるということになります。

「“学ぶ”と“働く”を繋ぐ」ポイントとは何かというのをまとめておりますが、企業は、一言で言うと、大学の教育と評価を基本的に信用していないということが言えるのではないかと思います。新卒採用では成績を聞きません。私達の時代は、少なくとも大手の商社や銀行は優が10個以上ないとだめだというふうなことが言われておりましたが、今は成績は聞かない。それから、大学の学問と仕事ができるかというのは別物という認識を、実社会と切り離された座学をイメージしています。なぜかという、人事の課長クラスというのは、大体80年代のバブルの頃に大学を卒業してしまっていて、そのころ大学が何と言われたかという、メディア等では、大学はレジャーランド化しているということが言われた時代に卒業している方々が、昔のイメージで今だに大学を捉えているというようなところでございます。

学生も学生なのです。学生が大学で何を学んできたかを語らないのです。特に文系では、「就職のときだけふえる副部長と副店長」と書いておりますが、昔は副部長が多かったですね。ですが、大体、副部長がバレてきまして、最近は副店長をやってきましたと、チェーン店で副店長まで行きましたということを言っております。では、何を学んだのだとかと聞くと、マネージメントを学びました等と言うのですね。そのようなことを学生が話すわけです。それか

ら、大学で何を学び、どんな経験を経て、何ができるようになったのかが見え辛いわけですね。結果的に入口の偏差値ベースのスクリーニングになってしまっているのではないかということができるわけです。

特に高校までは、受け身の授業を受けています。高校2年生で文系か理系かを選択する文理選択が、約7割の学校で入っています。それから、入学者の45%、私学で言うと5割を超えたところで、AOや推薦といったような非学力型の入試で入ってきています。驚いたのは、高校生にインタビューしてみると、どうやって大学を選んだかと聞いたら、指定校推薦の一覧の中で一番偏差値の高い学校を選びましたという子が出てきているのです。そういった形で浪人を回避して、行きたい大学より行ける大学へというようなことも言えます。そのため、就職が見え辛い社会科学系学部の人気が低下して、資格取得が仕事に直結する教育、医療周辺系、それから積み上げ式の理工系というところが人気が高まってきているという状況でございます。

「“学ぶ”と“働く”を繋ぐ」ポイントは何かということ、受動的な学生をいかに大学4年間で主体的、能動的な学生に変えていくかが、企業から求められているところではないかと思っています。しかも、今後は外国人もライバルと言いますが、大体私どもで面接をしていると、5人グループ面接をすると、昔はいなかったのですが、最近、大体2回に1回、留学生が混ざ

ってくるのです。で、GPAでこんなにとっていますとか、こんな研究をしてきましたというふうに、ファイルで見せられたりするわけです。そういったところと戦っていくことになっていきます。

それから、これからの社会の変化は、あまりにも変化が早くて、大学で学んできた専門知識がそのまま10年、20年もつとは皆考えていないわけです。そこで、その知識を応用できる、継続して学ぶ力をつける、私たちは「Learn How To Learn」と言っていますが、そうした習慣づけを大学でできているかどうかというところが重要になってくると思います。

今大学に求められているものは何かというと、世界的な傾向として、アウトカム重視というのは避けられないと思います。これはOECD、PISAで、15歳の学習到達度、それから大学卒業時の到達度ををはかるAHELO（アセスメントオブハイアーエデュケーションラーニングアウトカム）というのでも検討されています。日本でも、高校到達度テスト、達成度テストというふうに言っておりますが、こういったことが検討されたり、これはプログラム認定になるわけですが、国際バカロレア（インターナショナルバカロレア）の認定校は、現在十数校のところ、200校まで増やしていこうということが言われています。まさに「入学の国」から「卒業の国」実現に向けて動きが出てきています。

大学生活でどのような経験を経て、これは正

課、正課外も含めてですが、先生が何を教えていたかではなくて、学生が何をできるようになったか、これがアウトカムですね。それを客観的に説明できるか、こういったところを、大学の理念、ミッションに基づいて、その大学ならではの人材を育成して欲しいと思っているわけです。教育研究活動を通じて、大学がどのような人材育成をするか、学生へのコミットメントはあるか、それが伝わらないと、いつまでも入学偏差値の輪切りのスクリーニングになってしまうと思っております。大学は建学の精神があって、教育理念があって、3つのポリシーでつながっているわけです。大学内ではきちんとこれが存在しているかもしれません。しかし、これが高校、企業というところに伝わるかというと、なかなかうまく伝わっていないように思います。大学は基礎力を備え、学ぶ意欲のある学生を入学者に欲しいと思っておりますが、その一方で、高校生は、大学に行って将来の自分の姿が描けるかどうかということを考えているわけです。

企業側も、競争環境が変化して、企業が求める人材も変化しています。自社に合った人材を再考してきて、厳選採用というようになっております。最近、よくリクナビのほうの営業マンから電話がかかってきて、「小林さん、今おもしろい大学ないですか」と聞かれるのです。「おもしろい大学って何」と聞いたら、グローバル人材を育成しているとか、学生を鍛え上げているとか、おもしろい研究をやっているとか、そ

ういった特色のある大学があったら教えて欲しい、企業もそういう大学を探していると言うのです。実際、そういったところがなかなか伝わっていないような気がします。変化に対応できる人材を育成してほしい、あるいは、そもそも大学の改革のスピードが遅すぎるのではないか、こういったことを企業側が考えているわけです。

高校、大学のところは、大学入試改革による高大接続の改善を今、中教審を通じて考えられています。企業も、一方的に言うだけではなくて、やはり総合診断して、協力することで、主体的、能動的な学生を育成しようということで、いろいろな取り組みを始めています。いずれも、達成度というところですね。何ができるようになったかというところが求め始められているわけです。いずれにしても、このような大学、短大だから、こんな人材を育成しているということが伝わらなければ意味がないということだと思います。

最近、大学の方からよく、産業界で求められる人材像を明らかにしてほしいということと言われるのですが、私がいつも申し上げているのは、産業界なんてないのです。重厚長大産業で、10年、15年のプロジェクトを進める会社もあれば、私どもとかグーグルとかヤフーとかみたいに、1カ月単位でPDCAを回していかなければならない企業でもあります。商品のプロダクトサイクルが全く違うわけです。

そういったところの人材ニーズは全く違う

わけですから、大学側がこんな特色があると、
うちはこんな人材を育成しているんだ、こんな
教育をしているんだということで、フラッグを
立てていただければ、うまく伝わっていくので
はないかと思っております。

以上、いつもどおり早口な報告で恐縮ですが、
私の報告とさせていただきます。どうもありが
とうございました（拍手）。

◆話題提供 3：坂本 明雄氏

司会 小林先生、ありがとうございました。
話題提供の最後は坂本明雄先生です。

坂本先生は高知工科大学情報学群の教授で
いらっしゃいます。

それでは、坂本先生、よろしくお願いいたします
ます。

坂本 皆さん、こんにちは。高知工科大学の
坂本でございます。

今日は、この「社会が求める大学評価とは」
ということですが、大学にいる私の立場からい
たしますと、求められる方ですので、どういう
話題提供をすればいいのか迷ったのですが、大
学評価に関して私が知っている話などを含め
て、それから、これからどういうふうにしたら
いいのかいうことを含めて、話題提供としたい
と思います。

まず最初のページは、大学評価の歴史をレク
チャーするほどのものではないのですが、大学
評価と私が今所属しています高知工科大学と

の関係を皆さんにちょっとお話ししたいと思
います。

高知工科大学は平成9年に開学いたしました。
そのあと、自己点検・評価報告書を平成12年
3月、14年5月に出しております。

ここで「自己」という単語がついていますが、
この頃は、実際どういう文章だったかよく覚え
ていませんが、大学は点検評価をしましょうと
いうような形だったと思っています。自らを点
検し、評価するということですが、平成12年
3月に、平成9年度から平成11年度までの3
年間分の、自己点検・評価の報告書を出しまし
た。それから2年たって、平成12年度、平成
13年度を振り返ってという副題をつけて、自己
点検をもう1度いたしまして、この内容につい
ては外部評価、外部の方に来ていただいて調査
をしてもらい、その報告書を出していただきま
した。自己点検だけではいけないので、外部か
らの評価も受けましょうという時代です。正確
には何年からというのは私もよくわかりませ
んが、その「自己」というのが、今度は大学の
点検、評価は受けなさいという義務化の方向に
来まして、平成16年だと思いますが、所謂今
の認証評価が始まりました。その第1サイクル
が平成16年度からということでした。この第
1サイクルという表現は、第1期とか、いろい
ろな表現があるかもしれませんが、第1サイク
ルと言わせていただきます。大学の質を保証す
るという大きなテーマで、認証評価機構からの
評価を受けなさいということであります。イタ

リックになっている部分は本学が評価を受けたことについてで、大学基準協会の加盟判定を受審いたしました。平成17年度です。それから、少し色が変わっているのが、これは私個人の立場ですが、日本高等教育評価機構の評価員をいたしました。

先ほど申しませんでした、高知工科大学はいわゆる公設民営ということで、高知県の資金で設立した私立大学としてスタートいたしました。その当初、高知工科大学は私立大学協会に所属しておりまして、日本高等教育評価機構が設立された際、評価員を出してくださいという依頼がありまして、私は、評価員として務めて、1つの大学の評価をする立場にもありました。それから、平成23年度から認証評価の第2サイクルということになりまして、内部質保証システムというのが主たるテーマといいいますか、大学の自主的、自律的な大学改善を図るための評価ということになりました。高知工科大学は、平成24年に大学基準協会の認証評価を受審いたしました。それから、私はこの大学基準協会の評価委員会の委員を務めております。

実際に評価される立場として、点検・評価報告書の一部を執筆いたしましたし、それから評価する立場でも幾つかの大学を評価したという経験から、本日この場に呼ばれているわけですが、実際に、先ほどのお2人の先生方からのいろいろな内容について、私個人としての感想等ではお答えできると思いますが、今日のテーマ

に沿ったうまい答えができるかは、ちょっと自信がありません。

皆さんご存じの方も多いと思いますが、一応復習ということで、評価の手順はまず大学が点検・評価報告書を作成し、大学の基礎データあるいは根拠資料とともに評価機関に提出いたします。それをもとに評価員が書面評価をするわけですが、その後に、実地調査というのがありまして、施設等の確認とか関係者との意見交換等があります。ここで言う関係者というのは、もちろんその大学の教員、職員、それから学生との意見交換等もこの中には含まれております。そういったことをした上で、最終的に大学基準協会のほうから評価結果を大学に送り、必要に応じて大学からは、何年か後に、改善報告書を提出するという流れで大学評価が行われてきております。

この評価のことを考えるときに、私が工学系ですので、ちょっと思い浮かべましたのが日本技術者教育認定機構（J A B E E）です。そちらの中身をちょっとお話ししたいと思います。平成11年に設立されたものですが、これは名前からもわかりますように、技術者の教育を認定します。高等教育機関とありますが、これは大学、高等専門学校（高専）が含まれます。それぞれの大学、高専の教育プログラムですので、単純に言いますと学科単位のカリキュラムといいいますか、教育プログラムを審査して、社会の要求水準を満たしているかを認定するプログラムです。そういう認定審査であります、

国際的な同等性、教育プログラムの自主性を尊重する、あるいは審査を通じて教育の改善を図るという目的でありますので、大学を評価することと、形の上ではよく似ているだろうけれども、対象の中身については工学系のある学科単位の教育プログラムの審査認定になります。ですが、実際にこれが平成11年に動き出しまして、多くの工学部の学科でこれを受けようということで準備されたところもあります。余り勝手な表現をしてはいけませんが、いわゆる有名大学の工学部はほとんど受審をしなかったと私は認識しています。それともう1つ、先ほどの小林さんのお話の中にもJABEEという単語はもちろん出てこなかった。それは理系の、特に工学系の話ですので、そのほかの分野にはこれに相当するものが現在ないと思うのです。それにしても、これを受けましようと考えた大学の先生方の多くは、これで認定されたプログラムの卒業生でないと企業が採ってくれなくなるぞという、一部脅しもあって、準備にかかったという話だったのですが、必ずしもその方向には今行っていないと思います。そういうこともあって、私どもの高知工科大学の、私は情報系にいますが、情報も受審をしようという意思があって、ちょっと一時動き出したのですが、結局は審査を受けることをせずに今に至っております。

JABEEとはどんなものであるかというのを紹介しているホームページがございます。そこは利用者別に中身が違うのです。JABEE

とはこういうものだという説明が、高校生、保護者、進路指導の先生方向けに別々にクリックするようになっています。それから、JABEEのプログラムで履修している、あるいはそれを修了した学生向け、それから大学関係者、それから企業・産業関係者という4つの入口があって、これはJABEEの内容を説明しているだけの違いではあるのですが、これがこれからの評価の1つの方向としていいのかなと思います。これはちょっと後でもう1度申し上げます。

「第3のサイクルでは」ということで、このページでは、もうほとんど私の今の立場からすると、言いつばなしになってしまっていますが、第3のサイクルではこういう方向に行ったらいいのだがということを、思いつくままに列挙してあります。まず1つ目は、利用する立場からしても、あるいは先ほどの山本先生のお話でも、大学の長所なんかをアピールするのに非常に使いやすいというようなこともありまして、大学の特色、長所を前面に出した評価を行ってもいいのではないかと。今、少なくとも日本に存在する大学は、過去に2回の認証評価を受けているという前提であれば、こういうところが足りないということを強調するよりも、よいところを強調するという方向が1つあるのではないかと思います。

2つ目は、非常にいい加減かもしれませんが、受審する大学が評価項目を選択するやり方で、この項目は我々は評価項目として考えません

ということで捨てることもできるようなことがあってもいいのではないかと思います。

3つ目は、先ほど納谷会長のお話にもちょっと出てきましたが、いわゆる“評価疲れ”ということに対しては、第1サイクルに比べて第2サイクルは簡素化されているとは思いますが、それをさらにというのは少し問題があるのかもしれないと思いますが、考え方としては大学側が準備する資料の簡素化も必要かなと思います。

4つ目は、これも皆さんの共通認識だと思いますが、この評価の結果を大学のランクづけの方向には繋げるべきものではないと思います。

5つ目に、全構成員に受審の意識をというふうに書きました。

ここで言う全構成員というのは、もちろん大学の幹部の教職員以外に、全員にというのは難しいかもしれませんが、すべての教員、職員、それから学生が、その認証評価を受ける意義とといったものを、意識づけができるような、評価の方法ということも必要かなと思います。現在は、という言い方はよくないかもしれませんが、大学の中の一部の幹部教職員の仕事というふうになってしまっていないかという反省も込めて、全構成員に受審の意識をもってもらいたいものです。

6つ目に、大学評価の専門家の育成というのは、これも新しい方向なのか、よくわかりませんが、1つあるのかなと思います。

それから、最後に書いてあるのが、先ほどのJABEEの中のホームページを見て思った

のですが、評価結果の見せ方というのがやはりあると思います。現在はその評価結果の報告書は1つですが、受験生向け、あるいは高校の先生向け、企業向けに、本質は同じ評価の結果を見せるのですが、ページ数とかいうようなことも考慮しながら、それぞれどういう観点で評価結果を示すかという、何か工夫があってもいいのではないかと思います。それから今、大学ポートフォリオというお話もありますので、そちらとの関連もあると思います。

いずれにしても、こういう評価に関して、平成9年からの大学のことを少しお話ししましたが、実際我々、評価をされる立場といたしますか、報告書を執筆する立場からすると、受け身の評価を受けるということは、守りの評価になっていたと思います。それは性格上、仕方がないというか、当然かもしれませんが、特に第3サイクルでは、非常に抽象的で、言いつばなしになってしまうのですが、守りというよりは攻めという表現は正しくないかもしれませんが、前向きになれるような評価、何かそういう方向が必要ではないかと感じました。

それから最後のページは、公立大学協会についてです。私の大学は私立大学でスタートしましたが、平成21年から公立大学法人高知工科大学が設立する大学ということになっておりますので、我々は公立大学協会のほうに所属はしておりますが、公立大学政策・評価研究センターが昨年7月に開所して、新たな評価の方法論を少し模索するという動きがございます。こ

の件に関しては私もよく理解しておりませんので、話題提供の1ページとしてこの部分を設けましたが、余り質問をいただいても、十分に答えられません。

そういうようなことで、本日は社会で求めるという形、最初に申しましたように、私ども大学の人間としては何を求められるのかということになると思うのですが、先ほど打ち合わせの時に、山本先生、小林さんからもし突っ込みがあるとしたら、その時には今日一緒にこの後でモデレーターをやって下さる清水先生と2人で受けとめるということで、清水先生にはお願いしております。

これが今回の私の話題提供ということで、このあとのパネルディスカッションが皆さんにとって有意義になるようにと願いながら、終わりにしたいと思います。どうもありがとうございます（拍手）。

◆パネルディスカッション

司会 坂本先生、ありがとうございました。

続きまして、話題提供いただきました3人の先生方に壇上にお上がりいただき、パネルディスカッションを行います。

モデレーターは筑波大学副学長及び理事の清水一彦先生にお願いいたします。

清水 それでは、パネルディスカッションに入らせていただきます。

これまでの10年の認証評価の歴史において、

第1期はどちらかというと認証評価制度の普及が中心でございました。第2期は、大学に役に立つ内部質保証を重視して、大学基準協会の認証評価が行われております。

次の第3期に向けた、いわば予備的なシンポジウムになったと思いますが、今日の登壇した3人の方は高校側と企業側そして大学ということで、メンバーそのものが、第3期の評価のあり方につながるのではないかと思います。

ご存じのように、教育基本法第7条に大学の役割が新たに追加されました。大学の教育研究の成果を社会に提供することです。そして情報を公表する義務は生じたものの、果たして社会が何を求めているのかというのはよくわからない。

最初に山本先生の方から、高校では進路選択の比較資料としてそれを活用したいというお話がございました。そのために、大学は広報とか、あるいは説明の機会を設けてもらいたい、身近な資料としたいという声が上がりました。

小林先生の方からは、保護者とか受験者、特に保護者については、将来への不安とか、あるいは最新の情報について知りたいという要望があるとのことですが、これは通常の大学案内等カタログの中で、それぞれの大学が工夫されていると思います。

また、企業からの目は非常に厳しい。一言で言えば、大学の評価なんか信用していないというように言い切ってはいないでしょうが、大学の評価というよりは、むしろその養成する人材

をきちんと明確にして、それをアピールしてほしいということで、まだ依然として大学と高校、企業の間にはギャップがあるというご指摘でございました。

そうした高校や企業のニーズに対して、私と坂本先生がこれに対応するということになりませんが、その前に、小林先生、まだ依然として大学と企業あるいは高校の間にギャップがあるのですか。先ほどのご指摘をどのようにとらえたらいいのか、もう少しお話ししたいと思っています。

小林 この数年、大学が非常に大きく変わっていると思います。また、企業側も高校も随分変わってきています。つまり、全部が変わってきているのに、変わっていないイメージが残っているのですね。ですから、イメージでとらえているところがありまして、一言で言うと、コミュニケーション不足によるものではないかと思っています。

清水 情報交換も含めたコミュニケーション不足ということですが、これはいわゆるアーティキュレーションというか、接続関係が確立されていないということですね。もう1つ、戦後65年間、日本の大学で変わっていないのが目的規定なのです。

大学と高校は完全に法的には断絶されているのです。これは65年前の学校教育法で、そういう規定がなされており、当時はまだエリー

トの時代でしたから、その時はそれでよかった。しかし、昭和38年に大衆化を迎えて、今や56%を超え、ユニバーサル時代になってきた。ですから、本来ですと、すべての高校生が大学へ行く時代になっているわけですから、その目的を変えなければいけない。それにもかかわらず、法的には断絶しており、大学の学術研究と高校までの普通教育という目的は完全に切り離されている。私はそこに、大きな法的な問題、法的整備の遅れがあると思いますが、そういうものが依然としてギャップを生み出している1つの要因ではないかと思っています。

山本先生は、我々大学人はあまり気づかない、共通、比較の資料という、つまり、進路選択において大学を比較する上で、身近な資料として評価結果を活用できるのではないかとおっしゃいました。この比較というのは、農耕民族特有の概念といえます。狩猟民族ですと、あまり隣を気にしませんので、比較する必要はない。自身が問題であって、隣は何をしようと構わない。ところが、農耕民族というのは隣をものすごく気にするわけです。コメ文化を反映して、昨年より1俵多いとか、隣より1俵多いとか、日常的に今でも語り継がれています。こういう比較をするというのは、日本の文化でもあります。そういう文化のもとで、高校はその比較できる資料が欲しいというとらえ方ではいけないでしょうか。大学間の比較というのはどういう意味を持っているのでしょうか。

山本 先ほど比較という話をしましたが、これは従来の偏差値による比較の意味ではありません。実際に私が比較をしたのは栄養学科のことなのですが、いくつかの大学でどんな特色があるかというもので、生徒がイメージしているものに対して、その特色に合っているかどうかを比較する意味で、評価結果から幾つかを挙げてきたというものです。要するに、どう違うかというよりも、むしろどれに合はまっているかを探すためのものという意味で使ったというのが現状です。ですから、長所といいますか、特色を挙がっていたらという意味で、それを使ってという感じです。

清水 高校や企業に大学は挟まっているわけですが、今日の3人のパネラーのお話ですと、大学の長所とか特色とか個性とか、これらをもっと社会にアピールしたほうがいいということに共通点があると思います。これは、認証評価の今後の課題だと私は思います。現在の認証評価ではこういう意識では余りやっていないのではないかと。結果は社会に公表しなければいけないということは皆さんわかっているのですが、その大学の長所、特色、個性を社会にもっと強くアピールできるという視点から、認証評価の報告書とか結果というものを考えなければいけない。

私もいくつか認証評価機関に携わっていますが、評価結果は皆まちまちですね。非常に細かいところから、非常にシンプルでわかりやす

いところまで、それぞれ認証評価機関が“顔”を持っております。そういう意味で、その辺は統一する必要はないかもしれませんが、やはり社会にアピールして、社会が受け入れられるような評価様式とか、結果報告書というのも考えていかなければいけないと思っています。

坂本先生、いかがでしょうか。先ほどの大学の長所とか特色とかを前面にと言いましたが、高知工科大学はもう最初からそういう個性、長所を社会にアピールしているのではないのでしょうか。認証評価以外のところでのそういうご努力というのをお聞かせいただければと思います。

坂本 評価の結果をもっと社会に知ってもらいたいという考え方で、今それぞれの大学が広報活動をしていますよね。その広報活動とどう関係するのか。大体、大学評価というものの性格からすると、評価結果が広報になるというのも、ある意味ではおかしいのかもしれませんが。でも、高知工科大学の場合は、こういう表現が正しいかどうかわかりませんが、当時は、地方にある工科の単科の大学、そして私立大学としてスタートしましたので、初年度こそ受験者は非常に多かったのですが、徐々に減っていったという状況がありましたので、広報には非常に力を入れました。その中で、特に教育についての広報に力が入っていたというのは確かです。それがうまくいったのかどうかはちょっとよくわかりませんが、先ほど申しました平成21

年に公立大学になって、志願者の面では回復したということではあります。

清水 先ほど小林先生が、大学の知名度は25%、4人に1人ということですが、認証評価制度というのは、どのぐらいの認知度だと思いますか

小林 誰が大学を評価しているということを知らない人がほとんどではないかと思います。そもそも国が認可しているのだから、国が評価しているだろうと、一般的な人は思っているのではないかと思います。ですから、ホテルなどへ行っても、丸適マークがついていたりとか、ここはファイブスターのホテルですよとかというふうに、普通の人の評価というのはそういうふうに思っていますので、このような認証評価が大学に対して行われているという意識は、一般的な人では極めて低いのではないかと思います。

清水 そこは大きな問題といたしますか、課題だと思います。やはり社会に結果は公表しているのですが、大学が評価を受けているということが社会に浸透していないということは大問題ですね。認証評価機関の広報活動を今後進めていかなければいけないということにつながる問題だと思います。

大学というのは3つの要素から成り立っているとされます。教員と学生とカリキュラム

ということで、どの認証評価機関も、教員とか学生とかカリキュラムについての基準というのは設けられております。

先ほどの高校あるいは企業からの声を聞きますと、教員という言葉は余り直接には上がってこないですね。養成される人材とか、教育内容とか、教育方針とかが出てきました。

個人的には、大学力を規定する最も大きなものは教員力だと思っておりますが、これに関しては高校の方ではどうなのですか。大学のあの先生、この先生のところへ行くとか、そのような選択はあり得ないのでしょうか。

山本 今まで何人か、この先生がこの大学にいるからというので進学した学生はおります。実は私自身もそうですが、極端な話ですが、佐倉高校に赴任したときに、女生徒のひとりが東大を受けると言ってきたのです。理由を聞いたところ、文学部にこういう先生がいるので、その先生のもとで勉強したいということでした。しかしかなり少なくて、年に1人いるかいなかという感じです。

清水 先ほどもお話がございましたが、いろいろな大学生の調査をしますと、理系のほうは7割以上が大学で専門分野を学びたいという回答があります。日本の場合には入学の時から専門志向が非常に強い。そして、それぞれの専門で有名な先生というのは必ずいるわけですよ。そういう先生に憧れて、そこへ行きたい

というのも、1つの情報発信ではないかと思っています。

小林先生はこのことについてはいかがでしょうか。

小林 先生ということで言えば、企業の方が研究で連携する、あるいは協力するということにおいては、先生というところが非常に大きな比重を占めていると思います。企業から見ると、採用で学生を受け入れるという面と、研究開発を一緒にやっていくという二面性があると思いますので、後者のほうにおいては、やはり有名な先生とかいうところは企業側も見ていると思います。

清水 坂本先生、いかがでしょうか。学内における評価を通じて、教員力という面では、教員業績評価も早くから、厳しく、いろいろな基準でされていますよね。その辺の検証といいますか、効果はいかがですか。

坂本 教員評価というのを高知工科大学は平成12年頃から施行して、平成15年以降、さらに本格的に実施して、教員の年俸にも反映させる、場合によっては年俸が減ることもあるような形で数値化してやってきております。それは、確かに非常に高い点をとる先生、研究面で非常に点数をとっている先生もいます。あるいは、教育面で力を入れて、そちらの面で点数をとっている、いろいろな形でよく頑張っておら

れる先生がおられますが、一方では、少し点が稼げない先生がいます。ただし、その評価のシステムに関しては少し見直そうかという動きもあります。高い点数をとる先生が、清水先生の言われる教員力があるのかというと、少し違うと思いますし、先ほどお話がありました受験生にとって魅力ある先生かどうか、また少し別なのかなという気はいたします。

高知工科大学の教員評価システムというのは、その先生が1年間で高知工科大学のために何ができたのか、それは、その研究面で世の中にアピールしたという評価ももちろんあるし、入学してきた学生への教育をおこなったという意味での貢献もあれば、いろいろな形の貢献があるわけで、そういうものの合計を出していますから、ちょっと観点が違うのかもしれませんが。それから、教員力というのは、やはり大学の先生ですから、外部から見た場合には、その研究ということだろうと思いますが、研究面で、この先生のもとで研究をしたい、勉強したいということなのですが、また少し違う意味で、必ずしも高度な研究ではないけれども、非常に素晴らしい教育をしてくれる先生もおられる。それを学外にアピールというのは難しいと思いますが、そういった広い見方があると思います。ですから、いわゆる教育力というのについても議論しないといけないのかなというふうに、勝手ですが考えております。

清水 ありがとうございます。

このパネルディスカッションはテーマ「社会が求める大学評価」ということで、先ほど言い

ましたように、これは第3期の認証評価のあり

方を考える上での第3段階目の課題ではないかと思います。

現在は、内部質保証とか大学人の学内努力というものが認証評価の中心になっておりますが、次の第3期の認証評価のあり方として、社会に向けていかにその有用な情報を普及させ、それを定着させるかということが大きな課題になっていく。そのときに、各大学の改革や改善を支援するように認証評価も動いていかなければいけない。これはアメリカのアクレディテーションの歴史を見れば自ずとわかることで、当初は質の維持、水準というのが中心的な課題であった。そのために細かい項目も用意されていました。しかし、歴史とともに、徐々に評価基準は簡素化されまして、むしろ大学の個性を発揮させる上での改革・改善を支援するという役割に変わってきました。第3期は社会への有用な情報提供と大学の改革・改善の支援という方向にこうした認証評価が向かうべきではないかと思っています。

それに関して、休憩を挟んで、フロアからご意見をお聞きしたいと思います。

〔休 憩〕

【フロア・ディスカッション、質疑応答】

清水 会場の皆様から、いろいろとご意見があるかと思います。

どなたからでも、個別のパネラーへのご質問でも結構だと思います。ご意見、ご質問を承りたいと思います。いかがでしょうか。

所属とお名前をお願いしたいと思います。

質問者A ありがとうございます。A大学のKと申します。

1つ、小林さんにお伺いしたいのですが、ラーニングアウトカムの客観的な評価というのを強調されましたが、ここのところが非常に難しく、悩んでいるのです。

例えば、ボランティアの授業で、フィールドに出て動いてもらうということをやりますが、その中から何を学んだかということはどう評価するかということに、非常に頭を悩ませています。

彼らがよく言うのは、コミュニケーション力がついたとか、あるいは社会的な課題について気づいたとかと言うのですが、それを客観的にどういうふうな評価ができるのだろうかというところがあるのです。小林さんとしては、今そういうふうにおっしゃったアウトカムの評価というときに、どういうところをイメージされているかというのを、ちょっとお伺いしたいと思います。

小林 ありがとうございます。

いくつかあると思います。1つは、多分、企

業の採用という側面から見ると、学生が自分の言葉で成果を語れるかどうかというのが1つあると思います。

2つ目が、客観的に見えるかどうかというのと、例えばルーブリックみたいなものがあって、それで評価がある程度、ボランティアの成果みたいなものが幾つかあって、そのどの部分を学んだかというのがわかるようになっているというのが、多分考えられるだろうと思います。

3つ目が、先ほど山本先生もおっしゃいましたように、比較という点で行くと、外から見ると、どここの大学も皆いい教育をやっているというのですが、そのいい教育のどこがいいかわからないのですよ。ですから、例えば、地域のこういうところと連動して、こういった力を育てるためにインターンシップをやっている、あるいはボランティアをやっているというのが、ストーリーとしてわかると、外から見てもわかりやすいと思います。これが明確にラーニングアウトカムを指しているのかどうかは別として、外から見るとそういうふうに感じます。

清水 どうもありがとうございます。

今のご質問は非常に重要な視点だと思います。

高校までは受動的な学習が中心です。「学習」の、学ぶ、習うというのは、語義的にはまねるとか模倣するという意味なのです。ところが、大学の学習は、第2期教育振興基本計画、その前の中教審の答申から、「学ぶ、修める」に変

わかりました。これは、大学設置基準の1単位は45時間の“学修”という、あの学修が基本になっていて、大学の世界で使う言葉です。この学ぶ、修めるというのは、まねるとか模倣することだけではなくて、それ以外のさまざまな学習方法で知識・技能を獲得するという意味があります。したがって、大学生のラーニングアウトカムを評価するときには、授業での受動的な学習だけではなくて、課外活動とか、ボランティア活動とか、そうした主体的な学びといえますか、アクティブラーニングというものが含まれるということです。ですから、今後、大学における受動的学習のとらえ方やその評価というのは重要な視点です。ありがとうございました。

そのほか、どなたかご質問、ご意見、あるいはこれからの認証評価はこうあるべきだというようなご提言でも結構でございます。

どうぞ。

質問者B T大学のIと申します。

どなたにお答えいただいても構わないのですが、先ほど高校の山本先生が、求めるものは高校側からはないのだというようなことをおっしゃっていましたが、直接大学に何を求めるかというのはなかなか一言で言えることではないとは思いますが、今、清水先生がお答えになったように、大学基準協会の評価のあり方には何を求めるかということはあっていいのではないかと思うのです。特に、アウトカムの

評価をどのように求めるかという問題は、まさに社会の側のニーズは多様化しているわけで、それをこちらが合わせて何かを出すなんていうことは不可能なわけです。

ですから、むしろ大学はどのようにフラッグを上げるかと、小林さんがおっしゃっていた、そのフラッグをどう評価するかということこそが、大学基準協会のあり方ではないかと思うわけです。

その点で、小林さんでも、あるいは山本さんでもいいのですが、大学基準協会の評価のあり方をもっと明確化しろとか、例えば、上げたフラッグを学部、学科ごと、あるいは教授単位でもいいから、この先生のこの授業はすばらしい、この大学のこの学科の授業はすごいというようなことを、例えば、基準協会がランクづけをするのではなくて、アピールをしていくというような、そういう評価のあり方というのがあっていいように思うのですが、そういう点はいかがでしょう。

清水 高校のほうでも、ご存じのように学校評価というのが始まっています。自己評価だけではなくて、外部を含めた関係者評価とか第三者評価とかが進められ、その評価項目というのが非常によくできているというのを、私は知っています。その辺の高校での評価も踏まえて、大学基準協会の評価に求めるものというのは、ちょっと難しい質問かもしれませんが、山本先生からお願いいたします。

山本 高校の評価ですが、保護者や生徒、教員同士が、同じような形で自己評価というものをやっています。それをまとめたものを我々が共有するわけです。さらにそれを地域の方、大学の人とか、それから自治会の方とかいう方が入りまして、ちょっと名前は忘れてしまったのですが、そういう委員会を年に3回ぐらい開いて、最終的なまとめは最後の、これから3月に開かれると思いますが、そこで報告をするというようなことが行われています。それが直接、中学生が高校を選ぶ材料になるかという、そういうことはありません。ただ、その委員会の中に、地域の方がいますので、その後どういう評判が立つか、これはかなり影響しているかと思っています。我々が気にしても仕方ないのですが、そういう点で評価を使っていますが、生徒、保護者に、授業の仕方とか、発声の仕方とか話の仕方とか、5段階で評価をしてもらうというのをしているわけです。それは、全体でやるものや個人のやるものもあり、これは大学の自己点検・評価とほぼ同じだと思いますが、それを、教員が自分自身で生かす場合と、それから全体でまとめたものを全体で生かしていくという場合もあります。

現在、うちの高校では、土曜の授業を公開で行っているのです。これは地域への公開と、保護者への公開ということで、その際もアンケートをとっておりまして、それが翌週に全職員に配布されます。

そんなことで、自分自身の点検ということをやっている、最初に私のほうで評価結果に対して要望はないと言ったのは、要するに、評価結果は評価結果であって、選択の材料としての要素はないということです。もちろん、要素はないといいますが、その意味合いでとらえているわけではないので、大学基準協会も、あるいはその他認証機関も、評価をきちんとやってほしいという点ですね。高校の生徒の大学選択の資料として考えずに、きちんと自己点検・評価に基づいた評価をしてほしいと感じます。

それと、私は大学基準協会の短期大学の委員をしていまして、その中でも、私は外部委員ですので、評価委員会が行う評価は、内部評価であって、外部評価ではない、非常に甘いというふうに感じています。と言っても、これは趣旨が、大学あるいは短大をよくしていこうという趣旨にのっとってやっている、非常にいいことだと思います。

そこで、先ほど清水先生のほうからありましたが、こういう教授が非常にいいという情報は是非出してほしいなと思うのですが、内部的には、このくらいで出してはまずいのではないかなというような意味合いがあるのかもしれませんが、もうちょっと出してもいいのではないかなと思うのです。これは、研究の方面と、それから教育の方面と別々でしょうが、それぞれに出していただくと、利用するほうでは、少しでも書いてあれば、ああ、こんな点があるんだとい

うので、強く印象を受けられると思います。
特に最近ではウェブページでいろいろと大学の先生の研究歴が出ますが、本当にそうなのかというのはわからないもので、私の所属する学会に限りますと、何だこんなのはというのもありました。

それを私なりに使いましたが、要望しているものなら、大学の先生同士が評価して、いいものは本当にいいというふうに、あるいは教育的にいい先生はいいというふうに、ぜひ言ってほしいなと、そのくらい言ってみたく思うのですが、そのあたりをきちんと評価してほしいというのが私の願いです。

清水 小林先生はいかがでしょう。

小林 中身というよりは外との関係という点でいくと、例えば、先ほど先生もおっしゃいましたように、いい研究とかいい教育というのはなかなかわからないのですね。

ですので、ホームページでも言っているのですが、それはあくまでも主観的であって、客観的に相対化されたものではないと思いますので、その大学基準協会がそのある程度のグロスを見ているのであれば、その中でこういうところがいいなど言っていただけるといいのかなと思います。そういう観点でいきますと、今度は、大学ポートレートというのが10月頃から始まるということになっておりますので、その中で大学の評価というのをきちんと見られる

ようにしてほしいと思っています。特に、リンクが張ってあって、そこから各ホームページに移るのではなくて、例えば、概要ぐらいいは、例えば、ポートレートのトップに来て、この適格認定を受けていますと、それで概要はこうですと、こういうものがこの学校の特色でいいですよというものがわかると、非常に見る者としては見やすいかなと思います。それが、ポートレートの最後にリンクが張られているようになると、大学評価ってこのくらいの位置づけなのかというふうに外から思われてしまいますので、こういったところでどのあたりに位置づけるかということも、非常に重要なのではないかと思います。

清水 大変示唆に富むアドバイスだと思います。小林先生は大学ポートレートの委員会での委員も務めていらっしゃいます。

そのほか、何かご質問等ございませんでしょうか。

はい、どうぞ。

質問者C N大学のKと申します。

この10年ぐらいというか、6～7年、グローバル人材の育成推進ということが、文部科学省からも出ていますし、各大学にもかなり浸透してきたと思うのですが、先ほど小林先生の、企業がどういう人材を求めているかということで、外国語のコミュニケーション能力とか異文化に対する体験等については、随分以前か

らこの順位が変わっていないということでした。

成果が出ていないということもあるかもしれないのですが、企業がグローバル人材を本当に求めているのかどうかというところが、何か今日お話をいただいて、非常に感じたところがございますが、何かその辺でご示唆があればありがたいと思っております。

清水 グローバル人材、グローバル社会と言いながら、企業がグローバル化していないということを、たまにお聞きするのですが、小林先生、いかがでしょうか。

小林 この企業のグローバル化というところが本気になってきたのは、本当にここ数年だと思います。昨年は、大手企業3社に1社はもうほとんど外国人採用をするということを明言していますので、これからどんどん加速化してくるのだと思います。日本の人口が減少に入っただけで、2000年代後半に入ってからですので、多分、国際化というのは大学のほうが随分早く手がけられていると思います。今までは、企業で行くとメーカーが、まず製品がグローバル化していくということで、グローバル化を進めてきたのですが、これからは情報のグローバル化、人のグローバル化というところがどんどん進んでいき、対応できる人材が必要になるということだと思います。

では、即戦力として、英語だけができればい

いのかということよりは、やはりできる人材かどうかというのを企業は見ていると思います。ですから、多分、大学の側としては、すぐにインドネシアへ行け、タイに行けと言われたら、明日からもう働ける人材を育成していますよと言うなら、それはもうフラッグを立てて、グローバル人材育成している大学だというふうに言い切っていると思います。そうではないとしたら、やはりスペックを持った、ポテンシャルを持った人材を育成していますというふうなところを言っていただけならば、企業のほうは、いや、これだけ育成して、ここから海外へ送ろうかなというようなことを考えるのではないかと思います。多分、これからますますこういったことは必要になってくると思います。

例えば、リクルートで言いますと、ついこの間まで、95%の売り上げは国内で、海外は5%だったのですが、昨年の決算では、海外売り上げが何と20%になりまして、グループ企業の半分が海外になってしまったのです。社内報は全部日本語だったのが、昨年からは裏側から見ると英語になったのです。これがグローバル化かと現場では思うのですが、そんなふうに徐々に変わっていくのではなくて、多分一気に変わっていくと思いますので、これまで進んでいなかったから、これからは進まないということではなくて、これから急激に進んでいくのではないかと思います。

清水 ありがとうございます。

そのほかご質問、いかがでしょうか。

それでは、困ったときにはK先生にお願いをするということになっています。K先生は、大学基準協会の大学評価委員会委員をされています。

K 今日はどうもおもしろい話をありがとうございました。多分、おっしゃったとおりだと思います。私の所属する大学では、お勉強の仕方を教えてもらいましょうということで、非常におもしろいものをつくりました。

ただ、それから20年近く、どんどん改革といいながら、実態は戻ってきています。大学というのは非常にそういうのが強いのだなと思います。私も20年前はまだ50代で若くて、馬力もありましたが、70代になると、さすがにそれがなくなりましたが、今、ちょっとそれを心配しております。つまり、大学の改革というけれども、大学の個性と特質を生かしながら、それを伸ばしましょうと言いながら、実はどう考えてもうまくいっていない点がかなり出てきていますので、この辺でぼちぼち本気になって、本当の大学の個性とは何か、それを評価するためにはどうするかということを、考えていかなければいけないと思っています。

ただ、内部質保証の問題について、その仕方は実はわかりません。大学としては、内部質保証をどうしようかということで、パイロット的に、来年の4月から全学的にそれぞれの部署で細かく検討してもらって、それをまとめて、い

いところ、悪いところを挙げて、改革のためにやっていくことになっています。しかし、先生方に、先ほどお話があったように、“評価疲れ”があつて、いろいろなことをやっていただくと、余計に大変なことになってきますので、内部質保証システムは、先生方の余分な労働をどうやったら減らせるかというふうに使いたいなというところでやっています。

そういうことで、今日、坂本先生からいろいろお話をお聞きして、私としては非常にいい勉強になりました。

ただ、私は残念ながら、直接4月からはこういう現場、大学内の現場からは離れてしまいましたが、大学としては、これからも改革を続けていきたいと思っています。ほかの大学さんも、それぞれの大学で、一つ一つ課題を解決していくことが必要だと思いますので、そのためにきょうの内部質保証についてのお話は非常にためになると思っています。

単なる感想でございますが、以上でございます。

清水 お言葉、ありがとうございました。

今のお話で思い出すのが、有馬朗人元文部大臣が、自己評価が始まったときに、評価されるほうも疲れるけれども、評価するほうも疲れているのだというようなことをおっしゃいました。個人的には、狩猟民族の評価システムが日本に入ってきて、農耕民族にはあまりその評価というのは馴染まないというふうに、私は当初

から思っていますが、それはそれとして、農耕民族における大学評価のあり方というのが、大きな日本の課題ではないかと考えております。東の改革の雄である、K先生の大学は本当に改革にご尽力されてきましたが、それと同じく、西のほうでは坂本先生の高知工科大学も同じように当初から改革を進めてきております。今のK先生の感想について、坂本先生、何か同調するなり、反論するなり何かご意見はありますでしょうか。

坂本 本学は、大学ができて17年で、最初から何かこういうのがあって、どうもこれがうまくいかない、だから改革しようということはありせん。私は国立大学にいましたが、そこから、高知工科大学へ移って、開学当初から、国立大学とも違う、私立大学とも違うというようなことから、驚きの連続というのか、こんなこともありとか、こういう形でやっていくのですかとかいうように考えながら、何か走らされてきたという立場です。

ですから、ちょっと答えにはならないのですが、とにかくいろいろなことが新しく、例えば、教授会はどちらかというと、いろいろなことをメンバーに報告をする会であって、重要な決定は、当時は大学運営委員会と称しておりましたが、そこで責任ある人たちが比較的少人数で議論して決めていくというようなことをやるとか、新しいこともどんどんやってきました。

それがこの17年、うまく動いているとは思

いますが、今少し反動といたしますか、違う方向も必要ではないかというような議論が出されているようです。これが感想です。

清水 ありがとうございます。

特に日本の大学改革は、臨教審の始まった1984年からちょうど今年で30年を迎えますが、それ以後連綿と改革が続いております。臨教審以降の答申は着々と施策に反映され、かつての中教審の答申と全く違って、ことごとく実行されてきたということで、現場も非常に困惑したという状況もありました。

また、大学設置基準の大改正、基準の大綱化から、もう20年以上たちました。大学の先生方はカリキュラムの改革あるいは教養部の改革から始まって、当時は命を落とされた先生方も何人もいます。もっと逆上れば、日本に6・3制が導入されたときには、何百人という校長や教育長が命を落としています。大きな体制変化とか改革の時期には大変犠牲者がいるというのも歴史的な事実でございます。

認証評価制度は、もう10年たちました。その10年の間にかなり疲弊といたしますか、改革疲れというところもあるかと思います。そういう中であって、大学のリーダーといたしますか、指導力というの也被問われてきております。今日ご出席のO先生はそうした大学経営で非常に手腕を発揮されていると私は認識しておりますが、ご指名させていただきます。

○ △△大学の短期大学の〇と申します。急に清水先生のほうからご指名いただきました。今、大学基準協会の短期大学の評価委員会の委員長を仰せつかっております。山本先生も一緒に委員としてやっていただいているので、それで山本先生に先ほどの反論ではないのですが、短期大学は甘いという言葉がございました。確かに、甘い点は否定はいたしません。私の考え方ですが、皆さんおっしゃっていましたが、評価というのはいいところを前面に出して、褒めるべきだと思うのです。それでやる気を起こさせるというのが一番大学で重要なのではないかなと思います。短期大学のほうは、どちらかというとそういうようなフィロソフィをもって評価をしているつもりなのです。これは先生が先ほどおっしゃったとおりですが、何しろ大学が、教職員も含めて学生も活気があるような大学にしなければ、魅力があるような大学にしなければうそだと思うのです。例えば、短期大学というのは今全国ではどんどん減っていて、専門学校のほうがふえているということはあるんですが、幸いなことに、先を見越して、5年後とか10年の先にどういうふうに大学というのはなったらいいのだろうということを、常に頭の中に描きながら、それに向かって理想のプランを立てております。そして、現段階において何をやったらいいのかということを教職員で話し合って、学生の意見も聞きながら、あるいは外部の先生たちの、あるいは保護者とか、それから、本学は新聞社の方とか、いろい

ろな人から、どうすればいいのかというのを、常に把握しながら、それで現段階に合う一番いいような戦略を設けて、それでやっていけばいいのではないかなと思います。

ただし、努力しないとダメなのではないかなと思います。短期大学ではありますが、本学の場合には、医療職ということもあるのですが、今北海道から、九州沖縄のほうから、全国から来まして、高い倍率になっていますので、やり方ではないのかなと。こういうような自慢話をしたいからではないのですが、何しろ学生を大切にすることです。学生から、いい大学だ、いい短期大学だというふうに言わせて、口コミでふやすのが、私は一番いい方法ではないかなと思います。本学の場合には、高校訪問は1校もやっていません。それでも、学生が、来なくなれば、高校の先生が連れてきてくれるということになるのではないかなと思います。

参考にはならないと思いますが、努力は必要で、いつも学生目線の教育というのが一番重要ではないかなと思います。もちろん、保護者も大切です。

それからあとは、学生の面倒ですね。ちゃんと面倒を見るということと、あと就職は、本学の場合には理工学科と衛生学科とあり、国家試験が両方ともあるのですが、理工学科はもうこれで28年間100%連続合格していますし、衛生学科は今年で23年になると思います。やはり何が特色であるかということを前面に出さなければいけないのではないかなと思います。

長くなりまして、すみません。ありがとうございました。

清水 どうもありがとうございました。突然のご指名にもかかわらず、O流管理術をお話していただきました。現在、文部科学省の中教審では、日本における短期高等教育のあり方というのを審議しているところでございます。

また、先般の短期大学基準協会の学生アンケートによりますと、短期大学進学者は我々一般のイメージとは違って、7割は第1志望で入学しているという結果も出てまいりました。

短期大学の発展が日本の高等教育全体を引っ張っていくというように、私は個人的には思っています。高等教育の中で短期大学も非常に重要な役割を担っているのではないかと思います。

そのほか、ご質問、ご意見、承りたいと思います。まだ時間的には15分ぐらいございます。いかがでしょうか。

質問者D 私立大学の薬学部で教務部長をしておりますDと申します。

本業は薬学のほうですが、薬学というのは、わりと大学の目的もはっきりしておりまして、コアカリキュラムもありますし、それから薬学教育の認証も動いておりますので、比較的ラーニングアウトカムと、それからディプロマポリシーも設定しやすいです。そのディプロマポリシーを分解することによって、カリキュラムの

マッチングもやりやすいのです。しかし、こういうことを言うと文系の先生に怒られそうですが、本学の場合、薬学以外に文系学部もありますが、ディプロマポリシーに対して、どうやってラーニングアウトカムを設定するのかということで、よく議論しています。今日、ラーニングアウトカムの話が出た中で、現行のディプロマポリシーですとか、それらを分解したカリキュラムのマッチングのお話は余り出なかったように思うのですが、先生方、何かご意見があったら、お聞かせ願いたいのですが。

清水 3つのポリシーにかかわることだと思いますが、坂本先生、いかがでしょうか。

坂本 3つのポリシーについては、今まで、例えば、入学に関して、アドミッションポリシーについて言いますと、勉強する意欲がある学生を求めるとかいうような形でのものしか出していなくて、今、学内の教育関係の委員会で議論はしているようです。

しかし、このところ、うちの大学に関してはその動きは遠ざかっていて、あまりコメントすることがないのですが。

清水 私の筑波大学の話をしみますと、大学院も学部(学群・学類)も合わせると150ぐらいの学位の数があるのです。その150の学位ごとにすべてディプロマポリシーとかディグリーポリシーをつくり、そしてカリキュラムポリシー

も学位ごとにつくって、そしてアドミッションポリシーというように、それは“筑波スタンダード”という形でホームページでも公表していますし、冊子でも公表することになっています。

もう1つは、研究科あるいは学群、学類を超えた横断的な分野を幾つかつukったのですが、これは「学位プログラム」という名称で、一般の学部とか研究科に準じた組織として学内に位置づけています。この学位プログラムは設置審マターではないです。学生はそれぞれの学位プログラムに入学し、そこで学んで、学位をとるという、通常の組織と同じ機能を持っています。

これが今、学内で3つできました。これからまだ幾つかそういう学位プログラムをつくるということで、これは設置審が追いつかないです。横断的な、そういう学位プログラムの設置審の体制が整備されていないということで、筑波大学は先導的にやっていることでございます。

では、今の3つのポリシーについて、小林先生、何かありませんでしょうか。

小林 私は学外の人間なので、ポリシーなどはつくったことがないのですが、例えば、中教審の高大接続特別部会で高大接続のテストの議論がされています。その中ではきちんとアドミッションポリシーを明確化して、その人材をマッチングするテストというふうなことは言われています。ですので、多分今までであ

れば、例えば、ディプロマポリシーのところでは、社会に有為な人材を育成するとか、そのための豊かな学ぶ態度を持った学生とかでよかったと思うのですが、高大接続のテストが入試に直結してくるのが、多分数年後にやって来ると思いますので、そうしたところを見越して、このアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーをつなげていくというのが、本当に必要になってくるのではないかと思います。

質問者E ラーニングアウトカムとの関連について、何かご意見があれば伺いたいのですが。ラーニングアウトカムという話は出てきますが、一方で、大学側はディプロマポリシーという形で送り出す。そうすると、そこは連携が必ず必要だと思っているのですが、もしご意見があればお願いいたします。

小林 ディプロマポリシーというのは学位授与方針ということだと思います。一方、ラーニングアウトカムはもうちょっと、個人的な、あくまで社会で客観的にわかるような言葉で伝えていくというのが必要なのではないかと思います。これはもしかしたら先ほどのプログラム認定かもしれないですし、例えば、経営学なんかで言うと、AAPBSでしたか、何か国際認証のプログラムをとる大学も出てきたり、先ほどのJABEEもそうですが、何かきちんとした、ここまでを目指すというような到達度

みたいなものを見えるようにしたものではないかという気はしています。

清水 よろしいでしょうか。O先生。

O それでは、質問させていただきたいのですが、今日Oのお話は大体評価の点だったのではないかと思います。そこで私がちょっと先生方にお伺いしたいのは、やはり短期大学のほうも再評価というのが出てきたということですね。

そこで、先生方が再評価に対して、短期大学のこの評価委員会というか評価者に対して、どのようなことを望まれているのかということをお聞きしたいのです。

最初の評価のほうはある程度わかっているのですが、再評価についてはきちんとしたものがなかなか出にくい。要するに、評価の対象が違ってくるので、その辺りはどういうふうにお考えになられているのか教えていただきたいというのが質問でございます。

清水 再評価というのは、保留（期限付き適合）という判定を下された短期大学に対してですか。

O あるいは、指摘された事項に対して、何年後に再評価を行う際にです。

清水 改善報告ですね。再評価は、保留（期

限付き適合）というものについて、3年後にもう1回評価を受けるというものでございます。また、適合でも、勧告とか指摘事項があった場合には、改善の報告書を出すということが求められております。

これはほかの認証評価機関も同じだと思いますが、再評価とか、もちろん追評価という概念もあります。

山本先生は、もともと評価委員ですね。

山本 評価機構を利用する点で見ますと、新たにどの点が指摘されたことであるか、それをどう大学が対応していくかというのがわかりますので、その再評価の結果は非常に大切だなと思っていますが、そのくらいしか言えません。申し訳ありません。

清水 坂本先生。

坂本 今の再評価というのは、評価結果としてこういう点を改善すべきだという意見があったときに行うものですから、それは私も評価の立場よりも評価されるとき立場でいきますと、指摘を受けて初めて、ああそうなのかと思いつく点が多いと思うのです。しかし、この認証評価機関からのこういう指摘に対しては真摯に対応すべきだと思いますし、物事によりますが、例えば、評価の結果、こういうことが指摘されたからということで、大学にとっても悪いことではないはずなので、その外部からの

指摘で、学内のほかの教職員に説得をする力は非常にあると思うのです。ですから、そういう評価を受ける立場からすると、そういう指摘されたということは、非常にその内容をやりたかったけれども、どうしてもできなかったというようなことがもしあるとすれば、学内の改革という意味では、やりやすくなるような気はいたします。

清水 小林先生、何か今の質問に対してご意見はありますでしょうか。

小林 外から見ると、やはり最近よく言われるガバナンスが効いているかどうかというところを見るところだと思うのです。ですから、その指摘事項に対してきちんと大学が対応できているかどうか、意思を持ってやっているか、言われたからやるのではなくて、次の目標のためにこういうものを直していくというような、前向きな形になっていくかどうかというのは、非常に注目すると思います。

清水 私は、基準にダブルスタンダードがあってはいけないと思います。再評価であろうとなかろうと、最初の評価と同じ基準で見ることが公平でいいと思います。ただ、再評価とか改善報告、特に再評価を見ますと、本当に努力している姿が出ています。ヒアリングも現地調査もしましたが、その評価の水準の点から見た場合、もう少し足りないと判断されれば、同じよ

うな結果がまた出てしまいます。大学基準協会の方ではそういう努力とか、真摯な対応というものも含めた形で総合判断をするということですが、やはり基準はぶれてはいけないと思っています。この辺は、大学基準協会の工藤局長にお聞きしたいと思います。

工藤 今ご質問された再評価というのは、第1期の評価のところで保留、今は、第2期から保留という制度がなくなって、「期限付き適合」というふうな判定をされた大学に対して、3年後に再評価をするということですね。

そして、今、清水先生がおっしゃった追評価というのは、最初に評価を受けたときに、不適合であった大学は、評価を受けた翌年度もしくは翌々年度に、不適合となった原因となる部分を改善して申請するということです。

確かに、評価する際に必要な視点というのは、これは清水先生がおっしゃったように、最初の視点とやはり同じ視点で評価するというのが基本、前提だと思います。

しかし、例えば、学生の受け入れの問題であるとか、あるいは財務の問題があり、保留なり期限付き適合という要因になったということであれば、当時、例えば、0.6を下回っている大学が、それこそ1.0以上に短期間で持っていくとなると、毎年1.5倍以上の学生を受け入れなければいけないという話になってきます。ですから、なかなか一気に正常な値にまで持っていくということは難しいかもしれませんが、そ

ここに大学がどういう考えを持ってきちんと臨んでいるのかという、その努力の姿勢というものを、一方でやはり斟酌して評価をしていく必要があるだろうとは思います。

清水 どうもありがとうございました。

それでは、本日のシンポジウムをこれで閉じたいと思います。皆様方の温かいご協力、ご支援に感謝いたします。

今日は、主に次の第3期あるいは第4期に向かって、認証評価機関の掲げる次の目標に関して1つの示唆を与えるためのシンポジウムと位置づけ、いろいろなステイクホルダーから見た大学という点において新たな知見が得られたのではないかと思います。これを大学基準協会の認証評価の今後のあり方に反映していきたいと考えております。

本当に長時間にわたってご協力ありがとうございました。これでパネルディスカッションを閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。

司会 パネリストの皆様、ありがとうございました。

【閉会挨拶】

工藤 潤

大学基準協会 事務局長

司会 それでは、最後になりましたが、公益財団法人大学基準協会 事務局長兼大学評価研究部部長 工藤潤よりご挨拶を申し上げます。

工藤 皆様、本日は長時間、どうもありがとうございました。今日は大変活発な議論が展開されたのではないかと考えております。

認証評価制度が作られる段階で、認証評価の目的について次の2点が取り上げられました。1つは、大学の質の維持向上です。もう1つは、認証評価機関が設定する評価基準を満たしているかどうかを社会に公表して、最終的には社会が評価をするという、いわゆる市場原理の導入です。これは中教審の当時の答申（「大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について（答申）」（平成 14.8））において書かれています。

この後者のことについて言えば、つまり、大学の情報に関して、出す側と情報を受ける側との間にギャップがある、つまり、情報の非対称性があるということで、認証評価機関が評価結果を社会に公表し市場の判断を助ける。そのために認証評価制度を導入するという考え方も、そこには存在するわけでございます。

では、社会が必要とする大学の情報とは何か

ということになるわけですが、本日お話しただいた中には、修得が期待されるラーニングアウトカムの明確化、ラーニングアウトカムの検証等がご指摘されました。今後ますます、その大学で学ぶことにより、学生はどういう知識・技能・態度等を身に付けることができるのか、また実際に修得できているのかが求められるようになり、大学あるいは認証評価機関に対する説明責任というものが、その観点からより高まってくるものと思われます。

もう1つは、今日ご議論いただいた中には、大学の特徴なり特色というものをより社会に明確に示していくことが、評価において必要だというご意見も出たところでございます。

今、大学基準協会では第3サイクルに向けた認証評価システムの検討を進めているところでございますが、本日いただきましたご意見をその検討に反映させるべく、しかるべき委員会に紹介して議論を進めていきたいと思っております。

本日は大変お忙しい中、シンポジウムにご参加いただき、また活発なディスカッションを展開していただきましたことに対して深くお礼を申し上げ、私の閉会の挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

話題提供 1

「評価結果」は大学選択の資料として活用されているのか

山本 和彦

2014 年3月4日

山本 和彦

「評価結果」は大学選択の資料として活用されているのか

1. 高校では評価結果が利用されていない？

＜現状＞

＜選択肢になり得るか＞ 生徒の大学選びの資料になるか

＜比較の資料＞ 教員の資料として

2. 評価結果の活用事例について

- ・不適合？
- ・比較検討の資料として
- ・手持ちの資料として

3. 評価結果から感じたこと

- ・「評価結果」は報告書
- ・広報活動と解説

平成 25 年度 大学評価シンポジウム

「評価結果」は大学選択の資料 として活用されているのか

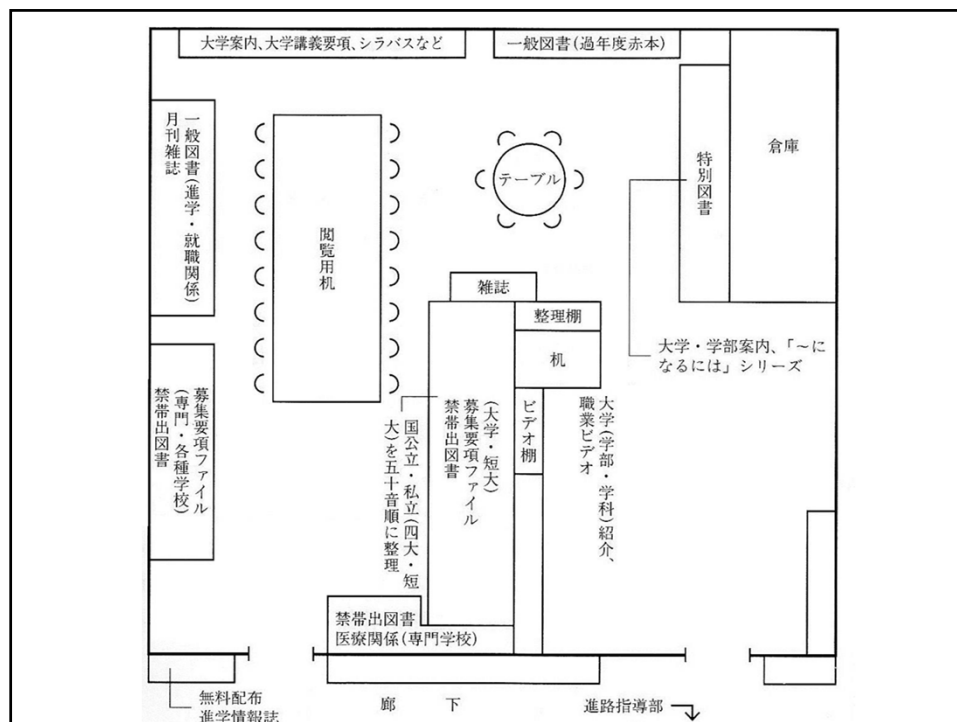
2014年3月4日

千葉県立船橋高等学校 教諭 山本 和彦

1. 高校では評価結果が利用されていない？

<現状>





登山にたとえると

- ⑨ ある程度活用している(個人)
- ⑧ まだ活用していない
- ⑦ 活用することで効果があるかわからない
- ⑥ 活用方法がわからない
- ⑤ 手もとにない 入手方法がわからない

- 利便性がわからない
- 活用できる資料かわからない
- 聞いたことがあるが、どのようなものかわからない
- 外部評価が行われていることを知らない

<選択肢になり得るか>

- ・何が学べるか
- ・就職は
- ・入れるか

生徒の大学選びの資料になるか

<比較の資料>

教員の資料としてなら.....

2. 評価結果の活用の例

- 評価を行った結果、「学生の受け入れ」について、〇〇年度における大学全体の収容定員に対する在籍学生数比率が0.36、〇〇年度における大学全体の収容定員に対する在籍学生数比率は0.46と大幅な未充足という問題がある。
- さらに、「教員組織」について、大学設置基準上必要な専任教員数が経年的に未充足の状態であり、〇〇年〇月では大学全体において6名不足しており、同基準上原則として必要な教授数も〇〇学部〇〇学科において1名不足しているという問題がある。
- 「財務」に関しても、教育・研究を支える財政基盤が極めて脆弱で貴大学の存立が危ぶまれる状況である。
- 貴大学は重大な問題を抱えていることから、現時点では〇〇の大学基準に適合していない。

2. 評価結果の活用の例

- 不適合？
- 比較検討の資料として
- 手持ちの資料として

3. 評価結果から感じたこと

- 「評価結果」は報告書

高校現場からは要望できない

- 広報活動と解説

大学の広報活動？

解説の必要性！

- 身近な資料か？

大学進学のための資料か？

話題提供 2

ステークホルダーから見た大学

小林 浩

ステークホルダーから見た大学



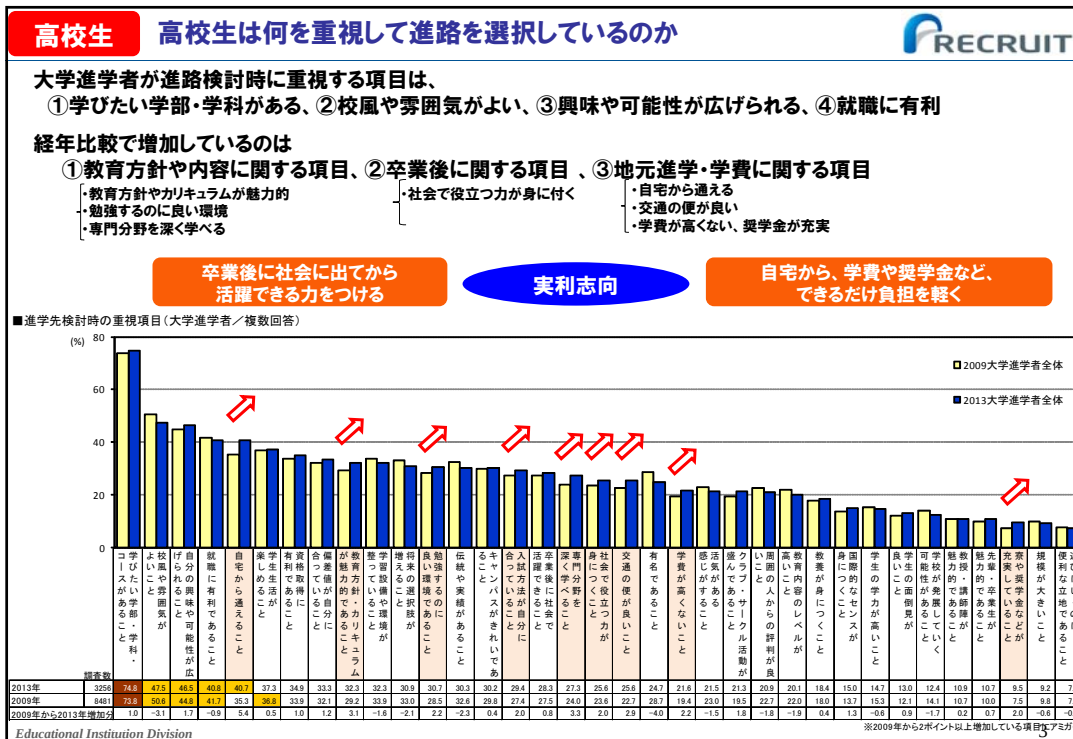
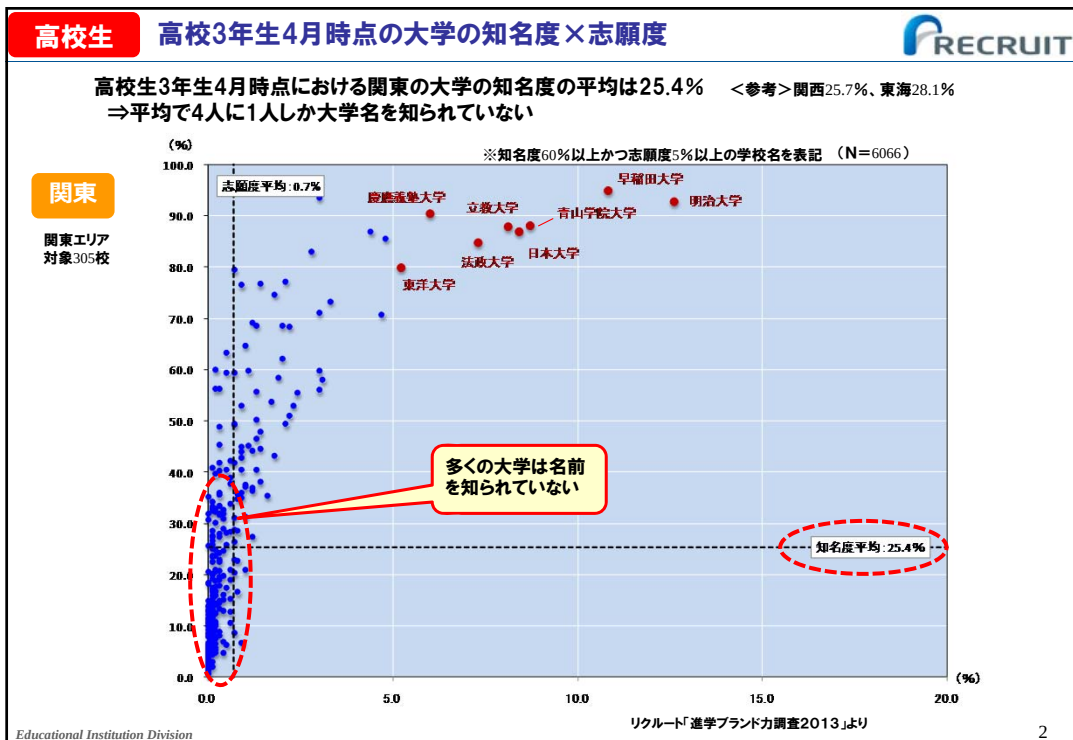
リクルート進学総研所長
リクルート「カレッジマネジメント」編集長
小林 浩



1

進路選択する立場から

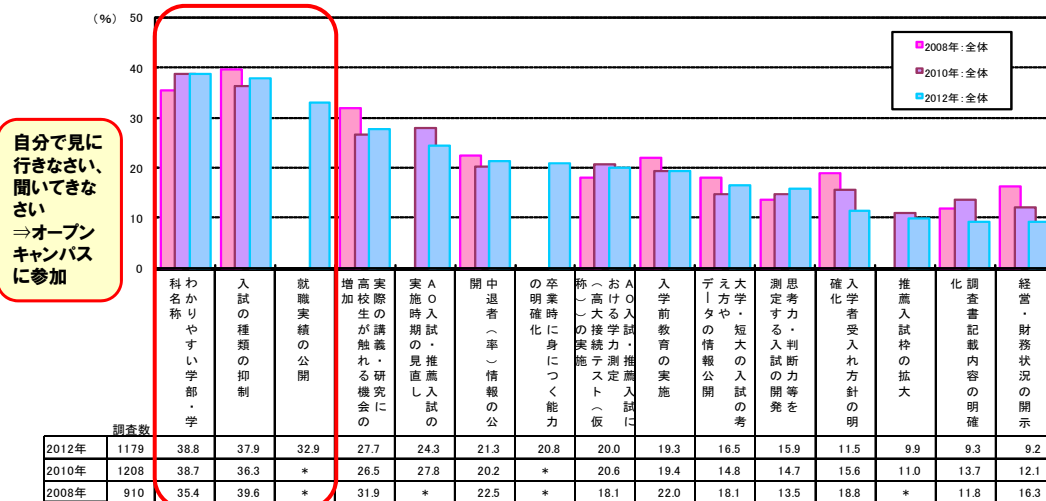
～高校生・保護者・高校教員～



高校の進路指導主事が大学に期待すること

要は、①学部・学科名称から学ぶ中身がわからない ②入試の種類が多すぎてわからない

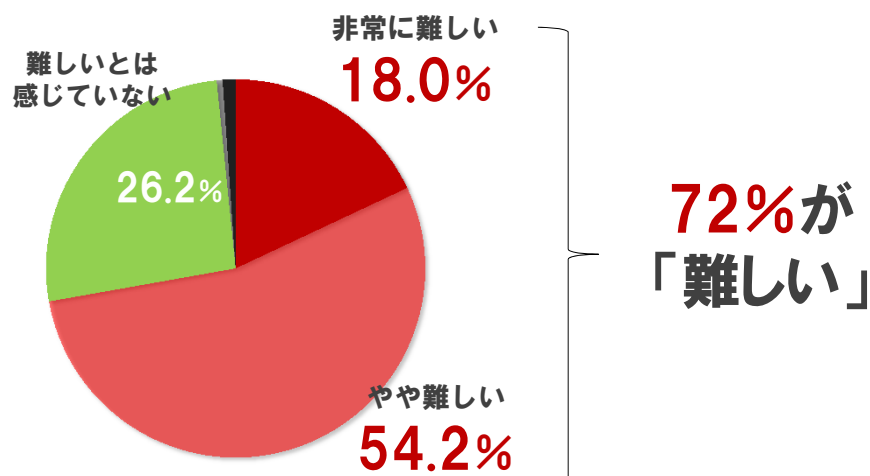
■ 高大接続・連携／大学・短期大学・文部科学省に期待すること：時系列比較(全体／複数回答)：上位15項目



Educational Institution Division

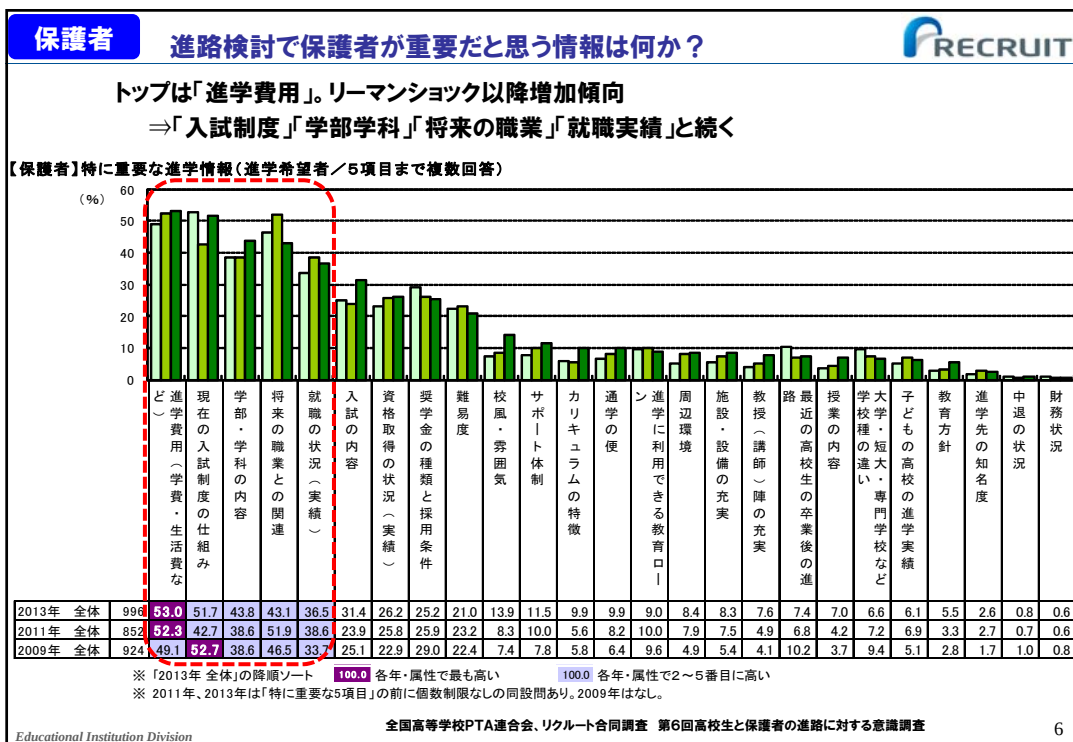
4

進路のアドバイスは困難か？



全国高等学校PTA連合会、リクルート合同調査 第6回高校生と保護者の進路に対する意識調査

Educational Institution Division



2

“学ぶ”と“働く”を繋ぐ

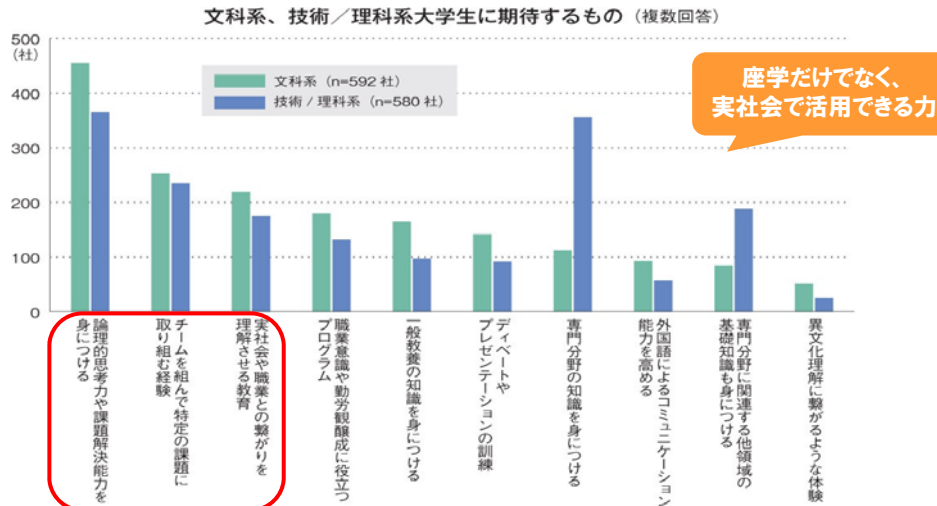
～企業と学生～

企業

企業の期待と大学教育のGAPはどこにあるのか



「実社会とのつながりを意識した」課題を「チームで取り組む経験」が求められている！
⇒アクティブラーニング、プロジェクト学習等の取り組みが期待されている



※(社) 日本経済団体連合会「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果」より編集室作成 「文科系」の降順ソート

リクルート『カレッジマネジメント』180号 May-Jun. 2013

Educational Institution Division

8

学生

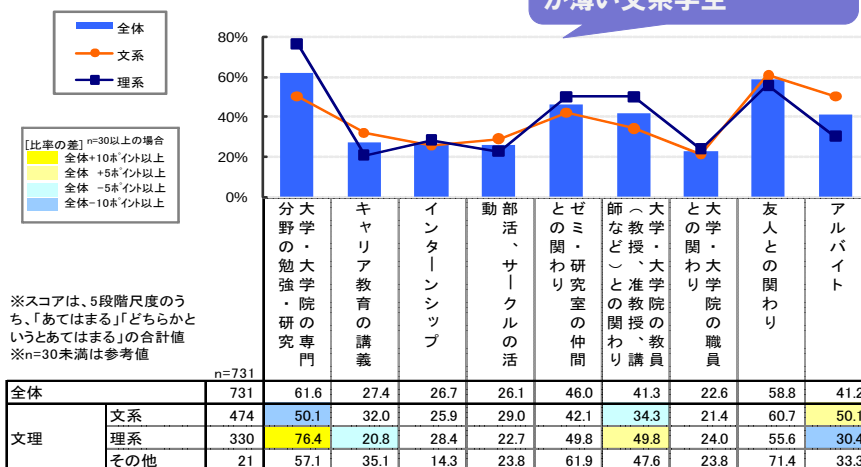
学生が将来を考えるうえで影響を受けたのは何か



- ・理系学生は「専門分野の勉強・研究」「ゼミ・研究室」「大学教員との関わり」
- ・文系学生は「友人」「アルバイト」

将来の仕事やキャリアを考える上で影響を受けた経験

大学の授業や先生と影響が薄い文系学生



※スコアは、5段階尺度のうち、「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」の合計値
※n=30未満は参考値

リクルート就職先決定に関する学生調査2010

Educational Institution Division

“学ぶ”と“働く”を繋ぐポイントは何か



企業は大学の教育と評価を基本的に信用していない！？

- ⇒新卒採用で成績を聞かない
- ⇒大学の学問と仕事ができるかは別物という認識(社会と切り離された“座学”をイメージ)
- ⇒学生は大学で何を学んできたかを語らない(特に文系。就職のときだけ増える「副部長」と「副店長」)
- ⇒大学で何を学び、どんな経験を経て、何ができるようになったのかが見えづらい
- ⇒結果的に入口のスクリーニングになってしまっていないか

高校生までは受け身の指導

- 例えば
- ・高校2年生で文理選択
 - ・大学入学者の45%はAOや推薦といった非学力型入試(指定校一覧の中で上位の大学選択)
 - ・浪人を回避して「行きたい大学より、行ける大学」へ
 - ・社会科学系学部の人気低下。資格取得が仕事に直結する学部が人気

“学ぶ”と“働く”を繋ぐポイント

しかも、今後は
外国人もライバルに！

Learn How To Learn!
(継続して学ぶ力をつける)

受動的な学生を大学4年間で
いかに主体的、能動的な学生に変えていくか

Educational Institution Division

今大学に求められているものは



世界的な傾向として、アウトカム重視は避けられない
OECD PISA・・・15歳の到達度、AHELO・・・大学卒業時の到達度
日本でも高校到達度テストの検討、国際バカロレア(IB)認定校の増加etc.
「入学の国」から「卒業の国」実現に向けて、

大学生活で

- 「どのような経験を経て」(経験価値:正課+正課外)
- 「学生が何ができるようになって」(ラーニングアウトカム)
- 「それが客観的に説明できるか」(客観評価)

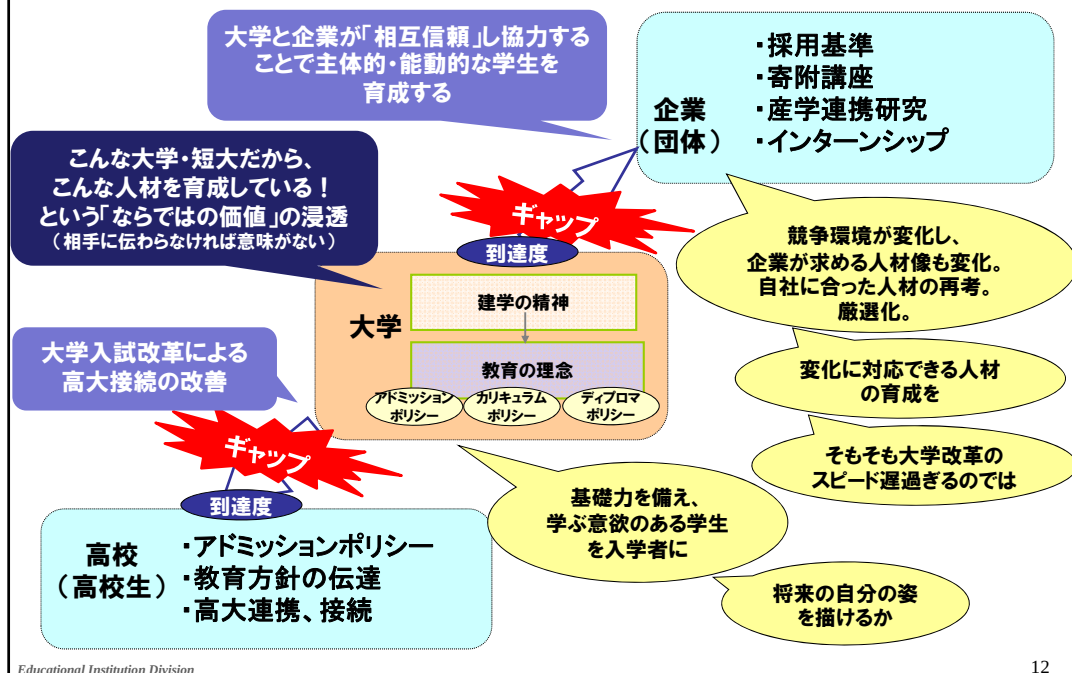
そうした各大学の理念・ミッションに基づいた、その大学らしい、
その大学ならではの人材＜独自性・個性＞を、
大学4年間を通じて育成することが重要

教育研究活動を通じて、
大学がどのような人材育成をするのかのコミットメントはあるか。
これが伝わらないと、いつまでたっても
入学時の偏差値輪切りのスクリーニングになってしまう。

Educational Institution Division

11

高校（入口）と社会（出口）のより良い接続が課題



Educational Institution Division

12

話題提供 3

社会が求める大学評価とは
—大学の何を評価し社会に示すか—

坂本 明雄

平成 26 年 3 月 4 日
JUAA 大学評価シンポジウム

社会が求める大学評価とは ― 大学の何を評価し社会に示すか ―

高知工科大学 坂本 明雄

○ 大学評価と高知工科大学 (KUT)

[平成 9 年] (KUT) 開学

(KUT) 自己点検・評価報告書, 外部評価報告書

[平成 16 年～] 第 1 サイクル: 大学の質を保証するための認証評価

(KUT) 大学基準協会による加盟判定審査 (認証評価) を受審

『日本高等教育評価機構 評価員』

[平成 23 年～] 第 2 サイクル: 自主的・自律的な改善を図るための助言的意味合い

「内部質保証システム」が構築され, 機能しているか

(KUT) 大学基準協会による認証評価を受審

『大学基準協会大学評価委員会 委員』

○ 大学評価の手順

書面評価＝点検・評価報告書＋大学基礎データ＋根拠資料

実地調査＝施設等を直接確認＋関係者との意見交換＋資料収集

評価結果 (協会→大学), 改善報告書 (大学→協会)

○ 新しいサイクルでは

- ・大学の特色・長所を前面に押し出した評価項目
- ・受審大学が評価項目を取捨選択
- ・準備資料の簡素化 (書類の形式はなくなる?)
- ・大学のランクづけにはつなげない
- ・全構成員 [教員／職員／学生] に受審の意識を持たせる
- ・大学評価の専門家育成
- ・評価結果の見せ方に工夫

○ 日本技術者教育認定機構 JABEE (平成 11 年 11 月設立)

JABEE の紹介は利用者別: 高校生・保護者・進路指導の先生／JABEE 履修生・修了生／

大学関係者／企業・産業関係者

○ 公立大学協会: 公立大学政策・評価研究センター (平成 25 年 7 月開所)

大学評価ワークショップ



社会が求める大学評価とは

－ 大学の何を評価し社会に示すか －

高知工科大学 坂本 明雄



大学評価と *高知工科大学*

平成9年／高知工科大学開学／

- ・ 自己点検・評価報告書 (H12. 3. 31)
- ・ 自己点検・評価報告書 (H14. 5)
 - － 平成12・13年度を振り返って －
- ・ 外部評価報告書 (H14. 7)

大学評価と *高知工科大学*

平成16年～認証評価の第1サイクル～

— 大学の質を保証 —

／大学基準協会の加盟判定 受審／H17

【日本高等教育評価機構 評価員】

平成23年～認証評価の第2サイクル～

— 内部質保証システム —

／大学基準協会の認証評価 受審／H24

【基準協会大学評価委員会 委員】

大学評価の手順

- 書面評価
点検・評価報告書／大学基礎データ／
根拠資料
- 実地調査
施設等確認／関係者との意見交換／
資料収集
- 評価結果（基準協会→大学）
- 改善報告書（大学→基準協会）

日本技術者教育認定機構

- JABEE：平成11年11月設立
- 高等教育機関の技術者教育プログラムが社会の要求水準を満たしているかを認定
 - 国際的な同等性
 - 教育プログラムの自主性を尊重
 - 審査を通じて教育の改善を図る
- JABEEの紹介は利用者別：
高校生・保護者・進路指導の先生方／
JABEEの履修生・修了生／大学関係者／
企業・産業関係者

第3のサイクルでは ... ?

- 大学の特色・長所を前面に
- 受審大学が評価項目を取捨選択
- 準備資料の簡素化
- 大学のランクづけにはつなげない
- 全構成員に受審の意識を
- 大学評価の専門家育成
- 評価結果の見せ方に工夫
利用者別／公表教育情報との関連づけ

公立大学協会

- 公立大学政策・評価研究センター
[平成25年7月開所]
- 「大学評価ワークショップ」
～ 新たな評価の方法論 ～
 - 大学の特色ある取組み
 - 各種評価結果の指摘を受けた改善活動
 - 内部質保証システムの機能
 - 大学評価ワークショップ自体の評価

大学評価シンポジウム

「社会が求める大学評価とは—大学の何を評価し社会に示すか—」

2014 年 3 月 31 日 発行

編 集 兼
発 行 人

公益財団法人 大 学 基 準 協 会
事務局長 工 藤 潤

〒162-0842 東京都新宿区市谷砂土原町 2-7-13

T E L (03) 5228-2020 F A X (03) 3260-3667
